三文學科

國語學國文學第一・第二講座

本講座は明治四十一年五月西洋文學第二・言語學・梵語學梵文學の三講座とともに設けられたもので、同月吉澤義則が助教授に任ぜられ國語學を擔當することとなつた。さらに同年九月文學科の授業開始とともに、幸田成行（露伴）が新たに講師となり、國文學を講ずることとなり、普通講義として「日本文脈論」、特殊講義として「文學各論—曾我物語・和讃」、講讀として「近松世話物」を講じたが、わずか一年にして辭意を表し去つた。

藤井教授

ついで明治四十二年十一月藤井乙男が講師を囑託され、四十四年九月教授に任ぜられるとともに本講座を擔任、四十五年六月文學博士の學位を授けられ、昭和三年八月停年によつて退官するまで、普通講義としては「近世國文學史」（明四四—大一・大一三—昭二）、「近世小說史」（大三）、「近世戲曲小說史」（大四—大一）などを、特殊講義としては「連歌俳諧史」（大三・五・七）、「近世和歌史」（大四・八・一〇）、「俳諧七部集の研究」（大一三）、「曠野集の研究」（大一四・一五）、「猿蓑炭俵の研究」（昭二）などを講じ、講讀としては「風俗文選」（大元・三・五）、「鶉衣」（大元・五・九）、「近松世話淨瑠璃」（大元・二・七・八・一〇・一三・一四）などが選ばれ、演習は在任期を通じ、源氏物語の各卷が續けら

れた。

藤井教授は本學赴任前に第四高等學校・第八高等學校の教授を歴任し、『近松門左衞門』、『俗諺論』、『巢林子評釋』などを公刊して、近松並びに諺の研究に先鞭をつけるところがあつたが、本學來任後は、まず『諺語大辭典』を完成し、『近松全集』十二卷の校註を最後として停年退官し、名譽教授になつた。その間教授の編著としては近世の小說・淨瑠璃・俳諧の各方面にわたつた論文集『江戸文學研究』のほか、『秋成遺文』、『古俳書文庫』、『有朋堂文庫』などの校訂解說があり、わが國近世文學研究の基礎を築いたといつてよい。退官後も論文集『江戸文學叢說』、『史話俳談』公刊のほか、『西鶴名作集』、『浮世草子名作集』、『近松世話物全集』などの校訂註釋に從い、あるいは帝國學士院會員として、あるいは芭蕉研究會會長として學會に寄與貢獻するところ大いなるものがあつた。

明治四十一年から大正十年ごろにかけては、言語學講座の新村出教授が、國語學の特殊講義として「國語研究法」(明四三・四四)を、また副科目として、「國語研究法」(大元・二)、「國語の比較研究について」(大八)、「西人國語研究の歴史」(大九)、「琉球語の研究」(大一〇)を講じた。明治四十四年には猪熊淺麿が教務囑託として有職故實の講義を擔當し、主として服飾につき、また加茂の祭につき、あるいは大正天皇卽位式について語りなどしたが、いつか休講のままとなつた。また大正十三年からは關保之助講師が有職故實を擔當、主とし武具について講じたが、一年ほどで休講となつた。

大正七年八月、吉澤助教授は文學博士の學位を授けられたが、八年六月國語學國文學第二講座が設置されるに至り、同年七月教授に昇任、昭和十一年八月停年退官し、名譽教授になるまで第二講座を擔任した。その間教授は、普通講義として「口語發達史」(明四三)、「國語學史」(明四四・大元・七・八)、「假名と假名遣」(大三・四・九)、「日本文學史」(大一二・一四・昭六―一一)、「歌語の性質」(昭二・三)、「和歌用語史」(昭四)、「日本文章語史」(昭五)などを講じ、特殊講義の題目には「國文學と口語」(明四四・大一三)、「國語各論」(大七・昭六・九)、「文章語脈」(大

九)、「國字に就いて」(大一五)、「片假名の研究」(昭二)、「てにをは研究史」(昭四)、「國語學史總說」(昭五)などがとりあげられ、講讀のテキストには、堤中納言物語、濱松中納言物語、住吉物語、狭衣物語、蜻蛉日記、とりかへばや物語、和泉式部日記、宇津保物語、枕册子、源氏物語が用いられた。演習はその間を通じて「日本文法」が主題として選ばれ、また昭和四年度からは藤井教授に代つて源氏物語についても行われた。

吉澤教授は廣島高等師範學校教授から本學に轉じたが、專門の國語學方面では、明治末年以來、前人未踏の訓點資料の研究に手を染めて訓點學の基礎を築き、また文章史の研究や國文法の面では「形容動詞」の論などに、解釋學的な立場からする發言が見られる。主な著書として『日本文法(理論篇)』、『國語國文の研究』、『國語說鈴』、『國語史概說』、『國語學史』などがある。國文學方面では源氏物語の注釋にとくに意を注ぎ、『對校源氏物語新釋』、『同用語索引』はその要領を示したものといえ、また『源氏隨攷』、『源氏物語今かがみ』などの著もあるが、上代文學・鎌倉室町時代文學についても深い關心をもち、それぞれ著書がある。さらに趣味として短歌をよくし書道に秀でたが、とくにその書道史についての見解は獨自のものとして高く買われており、これまた『日本書道史新講』その他の自著がある。また對外的には、日本諸學振興委員會・日本學術振興委員會・國語審議會の各委員などに任じ、斯學の振興に資するところがあつた。

吉澤教授

昭和三年度からは須原退藏講師が特殊講義「俳諧史—芭蕉以後」を講じ、ついで六年三月には助教授に任ぜられ十一年四月病氣のため一時退官するまで、普通講義「國文學史(江戸時代)」(昭八・九)、特殊講義「浮世草子概說」(昭五)、「假名草子概說」(昭七)、「連歌史」(昭八)、「俳論史」(昭一〇)、「芭蕉の研究」(昭一一)を講じ、近松世話淨瑠璃・俳諧七部集および西鶴の諸作品の講讀を擔當した。その間、林森太郎講師は昭和三年藤井教授退官後の補講

としてその學年中、紫式部の補講を行ない、昭和四年から六年度までは能勢朝次講師が、謠曲の講讀と特殊講義「謠曲論」（昭六）を行ない、また市川寛講師も七年から十一年度まで「歌舞音樂史（鎌倉時代）」（昭七―一〇）を講じ、神樂・催馬樂・宴曲および梁塵祕抄の講讀を擔當した。さらに昭和八・九年澤瀉助教授外遊中の補講として、佐伯梅友講師が「萬葉集の語法」などを講じ、同八年度には佐々木信綱講師が來講、萬葉集について述べ、九年度には久松潛一講師が「萬葉集に現われたる神の思想」について講じた。

吉澤教授退官の後をうけた澤瀉久孝教授は、大正四年本學の卒業、大正十一年八月第五高等學校教授を經て本學助教授に任じ、昭和八年三月から二か年海外留學した。この間九年四月には文學博士の學位を授けられ、十一年九月教授に昇任、第一講座擔任となり、二十六年三月停年制によることなく退官し名譽教授となつたが、退官後懇請されて一年間講師としてとどまつた。在任中は普通講義としては「上代文學概說」（昭四―七）、「和歌史」（昭一一―一三）、「萬葉集と古今集」（昭一四・一七）、「萬葉集と新古今集」（昭一五・一八）、「萬葉集と拾遺集」（昭一六）、「萬葉初期の作家と作品」（昭二一―二三）、「人麻呂とその作品」（昭二四・二五）など、特殊講義としては「萬葉集に就て」（大一四―昭二）、「明治の小說」（大一四・一五）、「明治小說史」（昭四・五）、「古事記に就て」（昭二）、「祝詞に就て」（昭三）、「風土記に就て」（昭四・一一）、「序詞の發達」（昭一六・一七）、「大伴家持」（昭一七―二〇）などが講題に選ばれたほか、とくに枕詞についての研究を昭和十三年から十五年までと、二十一年から二十四年まで講じた。その他講讀・演習はその間を通じ、おもに古事記と萬葉集について行われた。

澤瀉教授

澤瀉教授は主として上代文學、とくに萬葉集の研究に終始し、その堅實な實證的學風は獨自のものとして、高くかわれている。自著として『萬葉集の作品と時代』、『萬葉集新釋』、『萬葉集古徑』、『萬葉集講話』、『萬葉集佳品

抄』など、共著として『作者別年代別萬葉集』、『新校萬葉集』があり、退官後は『萬葉集大成』の編纂に參畫し、萬葉學界の今日の標準を示すところがあつた。また日本諸學振興委員會の委員として斯學の振興に活躍したが、退官後は「萬葉學會」を主宰し、年四回の機關誌「萬葉」の刊行と、隨時に全國各地で行なう講演研究會によつて、その普及と研究の發展に努めているが、生涯の事業としての萬葉集の全卷註釋は學界から深く期待されている。

この間島田退藏講師は昭和十一、二、四、七年度と來講して、枕草子、源氏物語の講讀を行ない、また十一、二年度には春日政治講師が「國語學概論」を講じ、能勢講師はふたたび十一、三、五年度と來講、「能樂論」（昭一二・一三）、「古代劇の發達」（昭一五）を講ずるとともに、「芭蕉七部集」（昭一一）の講讀を行なつた。さらに佐伯講師もふたたび吉澤教授のあとをうけて、十六年まで引き續いて日本文法の實習を擔當、十三年度から十五年度にわたつては橋本進吉講師が、普通講義として「國語史概要」（昭一三）、「日本文學概說」（昭一四）、「國語特質論」（昭一五）を講じた。さらに十五年四月からは池上禎造講師が、「敬語の諸問題」（昭一六）、「漢語の研究」（昭一七前・二三）、「古代語と近代語」（昭一七後―一八・二〇）、「語彙論の諸問題」（昭二一）、「近代日本語」（昭二五）などを講じて二十五年度に及び、以後は本學教養部教授として授業擔當をつづけている。なおこの二十五年度には同じく教養部阪倉篤義助教授が「記紀歌謠集」を講讀したほか、研究として小島吉雄講師は「新古今和歌集の研究」、金田一春彥講師は「國語音韻史の研究」をそれぞれ講述、玉上琢彌助手も前年に引きつづき「物語文學論考」を講じた。

なお、さきに病のため退官した頴原助教授は、昭和十六年ふたたび講師となり、以後、「さび・しをり・輕み」（昭一九）、「近世國文學の注釋的研究」（昭一九）、「近世小說史」（昭二一）、「俳諧史」（昭一八・二三）、「連歌史」（昭一七・二二）、「近世後期の小說」（昭二二）の講題で講じ、また演習として俳諧七部集、西鶴置土產などを擔當、二十二年五月には文學博士の學位を授けられ、翌年八月助教授に任官したが、病あらたまり同月逝去、同時に教授に昇進した。

潁原教授は大正十年の本學卒業、京都府立醫科大學豫科教授を經て本學に來任する以前、すでに『蕪村全集』を公刊し、『古俳書文庫』の校訂に從事して、俳諧研究の新進として知られていたが、本學に着任後は、俳諧を中心として近世小說の研究にも新らしい分野を開拓した。藤井教授の後を承けて近世文學の研究の權威であつたことは前後を通じて渝らない。その編著としては、論文集に『俳諧史の研究』、『俳諧史論考』、『風雅の道』、『俳諧精神の探究』、『芭蕉と近代藝術』、『余情の文學』、『俳句周邊』、『江戸文藝論考』などのほか、『芭蕉』、『芭蕉・去來』、『蕪村』、『蕉門の人々』などの諸著があり、また校註解說書としては『校本犬筑波集』、『俳諧名作集』、『去來抄・三冊子・旅寢論』、『校註七部集』、『生玉萬句』、『素龍本おくの細道』などをあげうる。なお教授には別に『江戸時代語の研究』の著があり、生涯の事業として計畫された『江戸時代語辭典』のカード數萬枚が未刊のまま殘されているが、これまた、教授の着實精緻な實證を重んずる學風の所產である。また藤井教授逝去後、芭蕉研究會會長を襲い、機關誌『芭蕉研究』を主宰して、廣く後學の養成指導にも力を盡した。

潁原教授

吉澤教授退官の後をうけ、第二講座を擔任して今日に至つている遠藤嘉基教授は、成城高等學校・大阪外國語學校講師を經て昭和十年から本學講師を囑託され、十四年三月には助教授に任ぜられ、二十四年四月教授に昇任、さらに翌年八月文學博士の學位を授けられた。教授はその間現在まで、講義（普通講義）として、おもに國語史、および國語學の概說を毎年講ずるとともに、研究（特殊講義）として、「假名展開史」（昭一〇）、「特殊假名遣の研究」（昭一一）、「國語史」（昭一二・一五）、「王朝時代の國語」（昭一三）、「形容詞の研究」（昭二三）、「義門の國語學」（昭二四）、「點本資料の研究」（昭二四）、「點本・抄物・山口栞」（昭二五）、「毛詩抄」（昭二六・二七）などを講じ、講讀には「和泉式部日記」、「土佐日記」、「落窪物語」および「源氏物語」が選

ばれ、演習には「源氏物語」（昭一七―二三）、「和泉式部物語」（昭二四―二六）、「古代國語」（昭二七）、「萬葉集の語法」（昭二八）、「源氏物語の語法」（昭二九）などがテーマとされている。

遠藤教授は昭和五年の本學卒業で、主として國語史研究、とくに上代から中世に至る間を中心とし、任官以前に日本學術振興會の『英譯萬葉集』の刊行に協力したことがあるが、近年は訓點語研究に力を入れ、カナ文學語との關係を明らかにする方向に進んでおり、自著として『訓點資料と訓點語の研究』があるほか、共編著として、『國語の歴史』、『ことばと文法』、『解釋文法』、および『義門全集』、『萬葉集研究年報』『點本書目』がある。また國立國語研究所員を兼ねて、近年は國語教育にも關係し、國語學と國語教育との緊密化につとめ、自著として『國語教育の諸問題』がある。對外的には昭和二十八年以來、國語審議會委員として國語政策面に參與し、また「國語學會」の理事となり、「訓點語學會」を主宰して今日に及んでいる。

つぎに澤瀉教授のあとをうけ第一講座を擔任して現在に及んでいる野間光辰教授は、昭和十二・十五兩年度、さらに頴原教授逝去のあとをうけて、二十三年八月ふたたび講師となつたが、二十四年五月本學助教授に任官、二十六年十一月教授に昇進した。その間並びに現在まで講義としては「近世小說史―西鶴以後」（昭二四・二五）、「談林俳諧史」（昭二六）、「十七世紀日本の文學と社會」（昭二七）、「日本文學史」（昭三〇・三一）などを講じ、研究としては、「西鶴の基礎的研究」（昭二七）、「近世世話物の研究」（昭二八）を、また演習講讀として「萬の文反古」（昭二四）、「俳諧七部集」（昭二五）、「西鶴の小說」（昭二三・二六・二九・三一）、「元祿歌舞伎」（昭二七）、「好色五人女」（昭二八）などが講義題目として掲げられた。

野間教授は昭和八年本學を卒業し、早く浪速高等學校教授として在任、江戸文學、とくに西鶴の研究に意をそそいでいる。その編著としては、論文集『西鶴新攷』のほか、『西鶴年譜考證』の著があり、校註書に『世間胸算用新註』があるが、さきに頴原教授、早稲田大學暉峻康隆教授によつて始められた、『定本西鶴全集』十五卷の編纂

校訂に昭和二十四年十二月以來、從事中である。また昭和二十六年六月以來東京大學守隨憲治教授、早稻田大學暉峻教授とともに「日本近世文學會」を創立し、春秋二回、總會ならびに研究發表會を開催、機關誌『近世文藝』を發行するほか、「西鶴學會」の同人として『年刊西鶴研究』に名を連ね、「俳文學會」の會員でもある。

この遠藤、野間兩教授の時代には、二十四年四月から新制京都大學が發足し、またその學力不足を補なう意味で、二十六年度から教養課程の二回生に專門課程の一部を授けることとなり、かつ大學院文學研究科設置のことなどもあつて、教養部の池上禎造教授と阪倉篤義助教授の授業擔當のほか、講師を依囑することが從來よりも多くなつた。すなわち二十六年度以後、池上教授は言語生活面に鍬を入れながら、現代語への究明を試み、今日に及んでいる。「現代日本語」(昭二六)、「言語資料としての文獻の處理に關する反省」(昭二八)、「言語の變化と言語生活」(昭二九)、「文字論の構想」(昭三〇)などの講義題目は、その清新な研究面を語るものといえよう。玉上助手は前年につづき二十六年度も擔當したが、大阪府立女子大學教授に轉出後も今日まで講師となつて、源氏物語を中心に平安朝文學を講じている。

同じく二十六年度には大阪市立大學濱田敦助教授が講師に囑託され、從來本學の國語研究面に不足とされていた中世語の史的解明に力を注ぐこととなつた。そして三十一年五月には本學助教授に轉ずることとなつたが最近の講題である「捷解新語」(昭二八)、「中國人及び朝鮮人の記錄した日本語」(昭二九)、「意味變化」(昭三〇)などに見られるような、シナ・朝鮮の文獻を驅使しての研究は學界の異彩とされている。また演習・講讀には「打聞集」、「宇治拾遺物語」、「和名類聚抄」などが用いられている。

つぎに小島憲之講師は、澤瀉教授退官後の上代文學講義のため二十六年度から來講して本年度に及ぶまで、萬葉集を講じているが、シナ文學との交渉面からする追究には獨自の風格を持つている。このほか二十六年度の講師としては、吉田精一講師が「近代文學の諸問題」と題し、また河野六郎講師が「朝鮮語學概說」と題して來講した。

ともに、それぞれの權威者として、前者は今までになかつた近代文學の講義を、後者はこれまた本學に久しく見なかつた朝鮮語の研究を披露して、ただに本講座專攻の學生にかぎらず、他學科專攻の學生にも益するところが多いものとして歡迎された。

昭和二十七年度には教養部阪倉篤義助教授が授業擔當として來講、今日に至つているが、その近代的文法理論の展開は將來を樂しませるものとして期待されている。同年度には谷山茂講師が新たに新古今集を講讀、三十年度にも「和歌史における諸問題」を講じ、中世の和歌にその長年の研究の成果を發表した。同じく山崎喜好講師も二十七年と三十年度の講師となつて俳諧史における獨自の見解を發表した。

二十八年度には中村幸彦講師が、その該博な知識を買われて、講義として「近世文學史」を講ずるとともに、二十九年には中國文學講座との共通講義として、「近世文學と中國文學」の講義が依囑された。また岡見正雄講師も、兩年度「民俗説話と語りもの」と題した講義を行なつたが、その民俗學方面の知識と、説話面に關する研究については早くから知られており、異色の講義の一つであつた。なお二十九年度には荻野清講師が、その得意とする元祿俳諧の面について「元祿俳諧の樣相と特質」と題して講じた。

さらに三十年度は新たに土橋寛、渡邊實、塚原鐵雄の諸講師が、「古代歌謠論」、「日本文章史」、「竹取物語」をそれぞれ講じ、本年度は鹽田良平講師が「近代文學史の研究」を集中講義した。

本講座の專攻學生は、はじめ國語學專攻と國文學專攻とにわけられ、明治四十四年から昭和七年三月までに、前者の卒業生一七名、後者一八八名を出したが、昭和八年三月卒業以後はすべて國語學國文學專攻として扱われることとなつた。昭和八年以後舊制大學の終末期である昭和二十九年までの卒業生三七四名、卒業生總數五七九名（うち選科二六名）を數える。大正末期に選科制度が改められたので、昭和五年以後は選科卒業生はなくなつたが、その後も選科に在學したものは九名に及んでいる。新制となつてから本年までの卒業生は三九名、また修士課程修了

生も五名出ている。なお舊制大學院には、外人が數名在學して研究中である。

つぎに年次を追つて、これらの卒業論文をみると、やはりそこに時代の變化が窺われる。まず國語學關係について見ると、この專攻は大正年間はきわめて稀で、そのテーマとするところも、時代的には上代か平安朝であり、室町・近世あるいは現代を扱うものはほとんどなく、主として語法に關する記述的報告が中心であつた。その國語學がようやくその數を增し、毎年專攻生を出すようになつたのは昭和に入つてからである。昭和も十年近くになると、時代的にも未開拓の中世から近世へと關心が移り、資料も從來の假名文學から字書・抄物・訓點資料・キリシタン資料・講義筆記ものなどの國語資料へ廣げられ、方法論的にも言語學との接觸が見られて、音韻方面の研究などには鋭いものが現われた。本學の國語學が注目され出したのはこのころからである。戰時中は一時學生數も少なかつたが、戰後大學が門戸解放を實施するに當り、國語學專攻生も增加し、ある年度の如きは、卒業生の半數を占めたこともあつた。戰後の國語學の論文を見て氣づかれるのは、現代語の研究によつて言語の本質を追究し、それによつて古典語の場合をも考えようとする態度が強く見られる點である。ここに言語哲學的に、あるいは言語心理學的に深まつた點が注目される。

國文學關係においても、明治大正年間を通じて專攻卒業生の總數は七〇餘名に過ぎない狀態であつたが、昭和に入つて毎年一〇乃至二〇名を出すようになり、その總數は五〇〇名を遙かに越えている。そして卒業論文の傾向もやはり時代の推移に伴なつて變遷の跡が指摘される。もつともその對象とするところは上代から現代に及び、その研究態度はあくまで實證を重んずることに變りないが、大正年間には明治文學の研究を題目とするものは極めて稀であつたのが、昭和以後ようやくその數を增し、戰後においてはとくに現代文學を主題とするものが增加した。これは單に本講座のみでなく廣く一般の風潮であるともいえる。そして今後ますますこの傾向は助長されねばならないと思われるが、明治以後の近代文學の研究はもはや印象的評論の域を脫して、根本資料の調査再檢討が要求され

るようになつて來ているから、その成果はむしろ今後に期待されねばならない。これに反して古典文學の研究は、明治以來の先人の業績と傳統を繼承して上代・中古・中世・近世の各時代の作品を對象とし、かつ優れた業績をあげているが、そこにも自ら中古文學の研究に中心があつた時代と、上代文學研究に中心があつた時代、近世文學研究に中心があつた時代という風に多少の推移が認められる。そして文獻學的考證學的態度と方法が一貫して重んぜられているが、次第に美學・言語學・心理學・民俗學・歴史學・社會學など人文諸科學の方法と成果を攝取して、從來の研究に再檢討を加え、文學論・文體論・比較文學などの問題を扱うものも現われるようになつて來ている。

本講座に所屬する研究室は、昭和の初めごろ研究室と稱するものがあつたが、國語學國文學研究室として設置されたのは昭和十六年五月で、澤瀉教授と濱田敦副手の力に負うところが大きい。研究室創設以來、室員の共同作業として刊行されたものに、『狩谷掖齋箋注倭名類聚抄』(昭一八)、『同國語索引』(昭一九)、『新撰字鏡(本文篇)』(昭一九)がある。このうち、前三者は澤瀉教授申請の日本學術振興會研究費補助による「上代文獻索引」の一部をなすもので、『古典索引叢刊』と銘うつて出版され、その後の刊行は出版事情により中止されたままになつているが、復活の計畫は進められている。なお有栖川宮家學術奬勵金により澤瀉教授らによつて昭和十六年八月から着手、十九年二月に完成した古事記校本の作製も出版事情により埋もれたままである。

本講座と表裏の關係にある「京都大學國文學會」は、明治四十二年十一月國文學および言語學專攻者の親睦と研究の向上とをかねて創立されたもので、藤井、吉澤、澤瀉各教授の三會長を經て、目下は遠藤教授が代表している。

研究方面では國文學會機關誌として、昭和六年十月以降、『國語國文』が毎月刊行されている。本誌はもと藤井教授および吉澤教授らの主宰する『國語國文の研究』(大一五・一〇—昭五・一〇、四九號で休刊)の改題されたもので國文學會の手に移つてからは、編集は本研究室で行ない、執筆者は必ずしも本學關係者と限らないが、本學の傳統的な學風を示すものとして學界に獨自の地位を占めている。また毎年秋(古くは春秋二回)會員の親睦をかねて、講

演會あるいは研究發表會が催され、その問學内には教官または先輩の指導のもとに、各種の研究會が開かれて、それぞれの研究にいそしんでいる。昭和九年十一月には、本講座開設二十五周年記念として、稀覯書展觀を行なつたが、また卒業生四〇餘名の執筆になる『京都帝國大學國文學會記念論文集』を編集刊行し、同二十七年三月には文部省の刊行費補助をえて、遠藤教授の『訓點資料と訓點語の研究』が出版された。

關係學會としては「國語學會」がある。これは昭和十九年三月、東京大學の橋本進吉教授の提唱に應じて遠藤助教授がこれに參畫し、全國的學會を結成したもので、事務所を東大國語研究室と本學國語學國文學研究室とにおき、年四回機關誌『國語學』を刊行するとともに、毎年春秋には講演會ならびに研究發表會を東京・京都において開催し今日に至つている。なお昭和二十二年九月には本學部教室を會場として、二か月にわたる「國語學基礎講座」を市民一般に開放し、戰後の學界に示唆を與えるところがあつた。また二十三年六月には、この講座に關係した遠藤、池上兩教授および濱田、阪倉兩助教授の手によつて『國語の歴史』が國語學會編として刊行された。また「訓點語學會」は、國語學の一分野として近年抬頭して來た訓點語研究のさらに大きな發展をはかるために、この道の東西の學徒をむすんで昭和二十八年十一月結成されたもので、遠藤教授がその代表者となり、事務所を本學に置くとともに、年四回の機關誌『訓點語と訓點資料』(昭和二九・四創刊)を發行し、さらに春秋二回、京都・奈良・東京の各地において研究發表會を行なつている。

中國語學中國文學第一・第二講座

本講座は明治三十九年六月、文科大學開設とともに設置され、開設委員の狩野直喜が講座擔當の教授に任ぜられた。しかし、同時に設置された六講座のうち、五講座が哲學科で、文學科は本講座のみであつたので學生を募集す

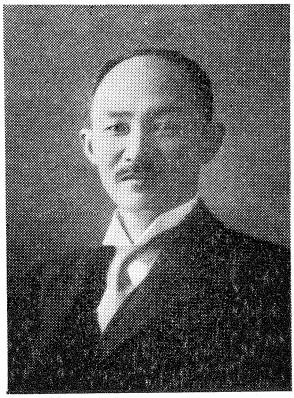
るに至らず、以後二年間狩野教授は、哲學科において支那哲學史關係の講義を行なつたのみで、本講座としての講義は行わなかつた。これよりさき、狩野教授は東京帝大卒業後、明治三十三年から本學教授となるべき豫定のもとに中國に留學、清朝考證學を究めるとともに、ローヤル・アジアティック・ソサイティの北支部會員として、西方支那學の方法を攝取し、當時未開拓であつた中國戲曲小說の研究にも着眼しつつ、三十六年歸國し、本學に附設されていた臨時臺灣舊慣調査會の事業である清國行政法の編集に從事していた。

かくて四十一年五月文學科諸講座が設けられ、正式に授業が開始された。狩野教授は、當時文學科全學生の必修となつていた普通講義の一つとして支那文學史を開講した。ついでその年十二月、東京高等師範學校鈴木虎雄教授が本學助教授として來任し本講座の陣容は整つた。鈴木助教授はその年度また普通講義として支那文學史、講讀として清の姚鼐の古文辭類纂、および副科目の作文を擔當、別に副科目清語を徐東泰講師が行ない、現代語講授の端緒を開いた。時に狩野教授は四十一歳、鈴木助教授は三十一歳、ともに本學部創設當時の他の諸教官と同樣、當時唯一の官立大學であつた東京帝國大學の學風にあきたらず、實證精緻の新學風の樹立を期していたのである。

四十二年以後明治末年まで、普通講義支那文學史はもつぱら鈴木助教授が講じ、特殊講義として、狩野教授の「六朝文學」(明四二)、鈴木助教授の「李杜韓白詩論」(明四二・四三)、「支那詩論史」(明四四)が行われた。唐宋の古文のみを尊重しがちであつた當時の學界で、狩野教授によつて六朝文學が取りあげられたのは新機軸であり、鈴木助教授の詩論史研究もまたここに發足している。なおこの間の講讀用書は、狩野教授の王先謙續古文辭類纂(明四二・四三)、元曲選(明四三・四四)、毛詩(明四四)、鈴木助教授の文選(明四二)、陶淵明詩集(明四三)であつた。また演習は四十三年から狩野教授により開始され、日知錄および文心雕龍が用いられた。作詩文は引き續き鈴木助教授、清語は徐講師が擔當した。なお四十四年には第一回卒業生三名(うち選科一名)を出した。

かくて本講座の新學風は、他の中國關係諸講座、すなわち哲學科の支那哲學史講座における狩野教授の講義が宋

儒の理想主義よりも清儒の實證主義に重點をおき、また史學科における東洋史講座が新資料による古代史の再檢討に勤であつたのとともに、當時の學界を聳動したが、當時の東大では中國關係の諸學が漢學科として一括されたに對し、本學では率先して語學・文學を哲學・史學から獨立させ、文學科に屬せしめたことは注目しなければならない。これはおのおのを專門化して、研究を精緻にするとともに、中國の語學および文學の研究を、中國自體の範圍にのみ跼蹐させることなく、他の諸語學・諸文學と連關對比して研究しようと企圖したものである。また講座名が、國語學國文學、梵語學梵文學とともに、當初から支那語學支那文學であり、西洋文學講座が、當時單に文學と稱したのと異なるのも、ある用意をもつていたと推測される。


鈴木教授

また當時の本學中國關係諸講座の新風の一つは、新資料の利用に敏感なことであつた。今世紀のはじめ甘肅省敦煌から發見された唐寫本は大部分スタイン、ペリオにより英・佛に運ばれたが、そのうち清國學部にもたらされた敦煌文書調査のため、狩野教授は四十三年九月、史學科の內藤、小川兩教授、濱田、富岡兩講師とともに北京に赴き、翌年二月には清國派遣報告展覽會を開いている。これら敦煌資料の利用も他の大學に先んずるものとして學界を驚かし、これら諸教授は敦煌派とも稱された。また本講座に關係深い學會として、「支那學會」・「京都文學會」が存し、本講座關係者も活躍したが、これは別項の記述にゆずる。

ついで大正期に入り、鈴木助教授は大正四年四月まず支那語學支那文學講座分擔となつたが、文科大學が文學部と改稱されたのと年を同じくして、八年六月第二講座が設置され、鈴木助教授は教授に昇任、その講座を擔當、九月には文學博士の學位を授與された。

大正年間の講義は、普通講義支那文學史は毎年鈴木教授が講じ、ただ留學中の五・六年度のみ狩野教授が擔當し

た。特殊講義は、狩野教授によるものに、「支那俗文學史」（大二）、「支那小說戲曲」（大五・六）、「清朝文學」（大七―一一）、「清朝制度と文學」（大一二・一三）、「西漢學術考」（大一三）、「兩漢文學考」（大一四）、「魏晉學術考」（大一五）、鈴木教授によるものに、「周詩の研究」（大元）、「宋詞史」（大三）、「明代戲曲概要」（大四）、「李夢陽製作の評論」（大一一・一二）、「呉梅村史詩」（大一三）があつたが、他に鈴木教授留學中から西村時彦講師が「漢文總說」（大五・六）、「辭章論略」（大七）、「屈原賦說」（大八）、「屈賦後說」（大九）、「辭章體例」（大一〇）を講じた。

講讀は、狩野教授が、韓非子（大二）、古文辭類纂（大三・四）、曾文正公詩文集（大七）のほか元曲をつゞけて講じ、鈴木教授は古文辭類纂（大二・八―一〇・一二）、李太白詩集（大二・三）、文選（大七―一三）、藝苑巵言（大一二―一三）、間情偶寄（大一三―一五）を用いたが、他に富岡謙藏講師が六朝文絜（大四―六）、唐及清四六文（大五・六）、史記菁華錄（大七）、古文辭類纂（大七）を、西村講師が古文辭類纂（大五）、楚辭（大六）をそれぞれ講じ、高瀨武次郎教授も八年から十年まで詩經を講讀し、十五年度には倉石武四郎講師が姚選國朝文錄を講じた。

また演習は、主として狩野教授により擔當され、日知錄（大二・七・八）、禮記注疏（大五）、尙書注疏（大九―一二）儀禮注疏（大一三）であつたが、儀禮注疏は十四年度以降大學院演習に移され、鈴木教授の文心雕龍（大一四）、詩藪（大一五）がそれに代つた。なお狩野教授外遊中の大正元年度には內藤虎次郎教授が講讀・演習を兼ねて尙書を講じた。作詩は狩野教授（大四・一二―一五）、鈴木教授（大二・三）、西村講師（大五―一〇）が分擔、清語（四年度から支那語と改稱）は、十五年十月までつづいて徐東泰講師が講じ、ついでその子徐仁怡講師が代つた。

これら講義題目によつても示されるように、この期には本講座清新の風がいよいよ發揮されたが、同時に國外學界との接觸の增進されたことも記憶されねばならない。まず狩野教授は、フランス人カーンの研究補助財團の援助により、元年九月から約一か年、中華・露・佛・伊・墺・蘭・伯・英・獨の諸國を歷遊して、ロシアのアレキセフ、フランスのシャヴァンヌ、マスペロ、ペリオらと親交を結び、またパリ國立圖書館、ロンドン大英博物館の敦煌寫

本を調査して、中國古典および俗語文章の資料を蒐集した。

また鈴木教授は、文部省留學生として五年三月から七年四月まで中華民國に留學し、陳寶琛、李盛鐸、沈曾植、況周頤、王國維などと交游した。さらに十五年八月には外務省對支文化事業部の主催する高等專門學校教授團の團長として中國滿洲各地を歷遊した。

さらに明治四十四年からこの期のはじめにかけ、狩野教授および內藤教授の知友であつた董康、羅振玉、王國維が、清末の紛亂をさけて京都に來住し、本學諸教授と頻繁に往來して、資料と學說を交換したことも、本講座はじめ中國關係諸講座の活力を增すものであつた。大正三年三月、京都帝國大學文科大學叢書の第二として、狩野教授の序文を附して刊行された『覆元槧古今雜劇三十種』は、羅振玉所藏の原本を覆刻したものである。また羅振玉は大正八年京都を去るに當り、わが國に遺存する漢籍の舊鈔本を覆印する資金を本學に寄附したが、本學部は大正十年それによつて、『京都帝國大學文學部景印舊鈔本』第一集を刊行し、昭和十七年の第十集に至るまで刊行を續けた。なおこれら諸氏が講義とまつたく無關係であつたのは、本學當初の西洋文學が外國人によらない外國文學の講義を標榜したのと、歩調を一にしたものであろう。また大正十一年にはハノイ極東學院のオルソーが狩野教授の客となつた。

なお狩野教授は、八年七月から十一年四月まで文學部長の職にあり、十四年十月には服部宇之吉東大教授らとともに、外務省の對支文化事業調査會委員として北京に赴き、かの地における東方圖書館の設立、四庫全書の續纂などを發起董督した。

なおこの期の學會としては、支那學會の活躍のほかに、大正五年五月、中國關係學科卒業生有志の漢作文の機關として「麗澤社」が組織され、狩野、鈴木兩教授と富岡講師を指導者とし、毎月一會すること二年餘に及んだが、のちに本學教授となつた文學科の青木正兒、哲學科の小島祐馬、史學科の那波利貞らはその有力な會員であつた。

會は時に、西村講師その他大阪文人の結社である景社と連合でも開かれた。また大正九年九月には、文學科卒業生青木正兒が、哲學科卒業生小島祐馬、本田成之とはかつて「支那學社」を立て、月刊雜誌『支那學』を創刊し、大いに筆陣を張り、諸教官も時に執筆し、いわゆる京都支那學の聲價を高めた。

ただ大正年間の卒業生はなおはなはだ少なく、選科をも含めて通計一四名に過ぎず、大正四年および十年から十三年に至るまでは一名の卒業生をも出さなかつた。

昭和に入つて、三年二月に狩野教授が退官し、以後本講座は鈴木教授の主宰するところとなるが、つぎに昭和十三年の鈴木教授の退官までを一期とすることができよう。

狩野教授は、昭和二年度の特殊講義「魏晋學術考」、講讀「元雜劇」、大學院演習「儀禮注疏」、副科目「作詩文」を、いずれも前年度の繼續として講じたのを最後に、三年二月停年退官し、四月名譽教授の稱號を授與された。教授は、本講座創設以來在任二十二年、清朝實證學の輸入、敦煌寫本の研究、戲曲小說の研究、唐人舊疏の研究などすべて新分野を開拓したが、同時に書を讀むに一字を忽せにせず、讀書精審の學風を本講座に確立した功績は大きく、自らもまた漢文を能くした。その還曆記念事業として、外國人を含む知友門人の論考三十三篇を收めた『狩野教授還曆記念支那學論叢』、東洋文庫藏寫本禮記單疏の影印、頌壽詩文の集錄である『稱觴集』の二種の出版物が獻呈された。教授自身は平生書を著わすに吝かであつたが、退官の前年その論文を集錄した『支那學文藪』(昭二)が發刊された。

さて狩野教授退官後、第二講座擔任の鈴木教授は、昭和三年四月から第一講座をも分擔して同十二年に及び、また大正十五年四月からその任にあつた倉石武四郎講師は、昭和二年四月助教授に任ぜられ、七年三月以降は鈴木教授とともに第一講座を分擔した。

普通講義支那文學はこの期を通じて鈴木教授が擔當したが、特殊講義は、鈴木教授の「唐宋詩說史」(昭三・四)

「宋元詩說史」（昭五）、「賦史」（昭九）、「駢文史」（昭一〇―一二）のほか、倉石助教授により「清朝許學」（昭六）、「清朝音學」（昭七―一二）が講ぜられ、清朝の學者による古代言語學說がはじめて紹介された。講讀は、鈴木教授により文選（昭二―一二）、焦循劇說（昭二）、桃花扇傳奇（昭五）、文學名家史傳（昭七―一二）、楊愼詩話（昭七・八）、史通（昭九・一〇）、陸宣公奏議（昭一一・一二）が、倉石助教授により姚選國朝文錄（昭二）、現代小說（昭六）、紅樓夢（昭六―一三）、說文解字注（昭七―一一）、爾雅義疏（昭一二）が講ぜられたほか、倉石助教授留學中は小島祐馬助教授が代つた。また七年度以降は、東方文化學院京都研究所講師として來朝した中國人傅芸子講師が、孟子・論語毛詩・唐詩・長生殿・胡適詞選・詩選・現代戲劇・明清戲曲・唐詩別裁集・西廂記・曲選など多數の講讀を擔當し、現代音による講授は大いに推進された。また演習は詩作文とともにもつぱら鈴木教授が擔當し、宋書樂志（昭二・三）舊唐書音樂志（昭二）、楚辭洪興祖補注（昭四―六）、毛詩注疏（昭七―一二）が用いられた。

なお六年度まで徐仁怡講師によつて授けられていた支那語は、七年以降時間數を增して傅講師が加わり、その講讀と相俟つて、現代中國語の授業は大いに推進された。

この間鈴木教授は、四年七月から歐洲諸國を巡歷して五年一月歸國し、倉石助教授は中國に文部省留學生として留學、歸朝後その主力を語學にそそぐ準備をした。また本學所藏の漢籍が學內各所に分藏され一覽に不便であるため、本研究室と支那哲學史・東洋史各研究室の協同で、全學漢籍總合目錄の編纂が行われ、昭和十年三月『京都帝國大學所藏漢籍目錄第一』として經部を、ついで十三年三月第二として史部が刊行されたが、子部・集部は成稿のままとなつた。さらに昭和四年四月狩野名譽教授を所長とする東方文化學院京都研究所が設立され、六年からは倉石助教授もその研究員を兼ねることとなつた。

因みに、この十一年間の卒業生は、選科生を含め五〇名であつた。

つづいて昭和十三年鈴木教授の退官から二十年の終戰に至る間を、一期として概觀しよう。まず鈴木教授は、十

三年一月停年により退官したが、本學の在任前後三十一年、つねに中國文學の正統である詩文の文學を講じて、よく學者をして塗徑を誤らしめず、自らも漢詩をよくしたが、その詩論史研究は中國の學者に先んずるものであり、著書のあるものは華譯された。在任中の論著に、『支那詩論史』(大一四)、『支那文學研究』(大一四)、『白樂天詩解』(昭二)、『業間錄』(昭三)、『國譯杜少陵詩集』(昭三—六)、『注解曹大家女誡』(昭一〇)があるが、退官に當り知友門下の組織する還曆記念會は、その著『豹軒詩鈔』十四卷・附錄一卷(昭一三)を刊行してその壽を頌した。また教授はその年五月名譽教授の稱號を授けられた。

青木教授

倉石教授

さて鈴木教授退官後、昭和十三年三月、本講座第一回の卒業生である東北帝國大學青木正兒教授が本學教授として來任し、第一講座を擔任した。また倉石助教授は、十三年三月文學博士の學位を得、その年六月第一講座分擔から第二講座分擔に轉じたが、十四年四月には教授に任ぜられて、第二講座を擔任した。かくて昭和初年の狩野教授退官後、十一年を經て二講座がふたたび舊のごとく擔任教授をもつこととなり、青木教授はもつぱら文學を、倉石教授は主に語學を講じた。なお倉石教授は十五年四月以降東京帝國大學教授を兼任し、二十三年の東京大學轉任に及んだのである。

この期における普通講義としては、青木教授の「支那文學概說」(昭一三)、「支那文學史」(昭一四—一八)、「漢魏六朝の文學」(昭一九)、「魏晉南北朝の文學」(昭二〇)の文學と、倉石教授による「小學通論」(昭一三—一五)、「支

那語學通論」（昭一六―一八）、「支那語學史」（昭一九―二〇）の語學が相並んで講ぜられ、特殊講義としては、青木教授が「近世藝苑方志」（昭一三）、「明代蘇州の藝苑」（昭一四）、「清代揚州の藝苑」（昭一五）、「清代の文學思想」（昭一六―一七）、「近世文人生活の諸相」（昭一八）、倉石教授が「支那語法の研究」（昭一四―一六）、「顧炎武の音學」（昭一七）、「小學階梯」（昭一八）を講じたが、十九・二十年度は戰爭苛烈となり、聽講學生乏しくこれを缺いた。

また講讀の用書として、青木教授は西廂記、元曲、韓愈文讀、桃花扇傳奇、文選李善注、史記、鍾嶸詩品などを倉石教授は紅樓夢、史記などを用いた。一八年度には吉川幸次郎講師が韓昌黎文集を講授した。傅講師は引き續き講讀を擔當したが、在日九年ののち十七年二月歸國したので、十七年度からは羅繼祖講師により論語、唐詩選、讀法入門、左傳が授けられたが、同講師もまた十九年七月歸國した。演習は青木教授により楚辭（昭一三）、文心雕龍（昭一四）、李長吉歌詩（昭一五）、清河書畫舫（昭一六）、楚辭補註（昭一八）が、倉石教授により說文解字注（昭一四）語石（昭一八）が行われた。また十四年度以降新たに設けられた支那語學實習は、傅芸子、陳瑜、陳希昌、羅繼祖、王之淳、金毓本の各講師が年を分つて擔當、副科目の支那語もこの間倉石教授および傅、羅、王三講師によつて授けられた。

要するに、この期は文學と語學が並行して授けられた時期であるが、戰爭の熾烈化した十九年度のごときは、青木倉石兩教授の講義と青木教授の講讀、工講師の實習があつたのみで、この期の卒業生はわずか一〇名、十五年以後は十九年度を除き卒業生を出さなかつた。

なおこの間十三年十二月一度「麗澤社」が再興されたが、十六年七月に至つてやんだ。

かくて戰後二十二年六月第一講座擔任の青木教授が停年により退官することとなつた。教授は本學來任前すでに『金冬心の藝術』（大九）、『支那文藝論叢』（昭二）、『支那近世戲曲史』（昭五）、『支那文學概說』（昭一〇）、『元人雜劇序說』（昭一三）などを著わしていたが、在任中の著述には『江南春』（昭一六）、『支那文學藝術考』（昭一七）、『支那

文學思想史』（昭一八）などがある。ことに近世戯曲史は前人未到の研究とされ、王古魯によりかの地で華譯され、海外の學者をも嘉惠している。教授の興味はもつとも明清の文學にあつたようで、これまでもそれらは鈴木、狩野兩教授によりそれぞれしばしば講ぜられたが、必ずしも山林草野の藝術家に及ばなかつたのに對し、教授はよくその幽潛を發した。退官に當り麗澤社は知友門人六十名の執筆になる『中華六十名家言行錄』（昭二三）を刊行してその壽を頌し、雜誌『支那學』は華甲間話を特集し、自からは『華國風味』（昭二四）を著わした。

青木教授の後任には、二十二年六月、吉川幸次郎講師が教授に任ぜられて、第一講座を擔當した。教授は大正十五年の本學卒業、昭和三年から三か年中國に留學、のち東方文化研究所研究員となり、十八年からは本講座の講師となり、この年四月文學博士の學位を得たのであつた。

かくて二十二年から二年間は、吉川教授が文學を、倉石教授が語學を主として講じたが、二十四年五月に至つて、第二講座擔任の倉石教授はかねて兼任していた東京大學教授に專補され、本學を去つた。教授は書を讀むこともつとも精審であり、純粹な語學を開講したこと、從來の訓讀法によらないで音讀法による授業を確立したこと、現代文學をはじめて教科に加えたことなどすべてその功績である。在任中の著述として『支那語教育の理論と實際』（昭一六）、『支那語發音篇』（昭一三）、『支那語語法篇』（昭一三）、『支那語繙譯篇』（昭一三）、『支那語法入門』（昭一四）、『支那語發音入門』（昭一七）、『中國語法讀本』（昭二三）など多い。

倉石教授退官後、第二講座はしばらく空席であつたが、翌二十五年七月、すでに二十三年から來講していた東北大學小川環樹教授が本學教授として來任、第二講座を擔任することとなつた。教授は昭和七年の本學卒業、九年四月から二か年中國に留學、歸國後東北大學に在任していたもので、來任の翌年四月文學博士となつた。なお二十五年四月から、從來の「支那語學支那文學講座」という名稱を「中國語學中國文學講座」に改めることとなつた。

かくて二十五年以降、本講座は吉川、小川兩教授により運營されつつ現在に至つている。なお二十五年六月には

人文科學研究所田中謙二助手が專任講師として來任したが、翌年四月教養部助教授に轉じた。この間學制の變更に應じて、講義の様相も多端であつたが、講義は文學史乃至文學概説を吉川教授、語學概説を小川教授が擔當、研究は、吉川教授により「杜詩」(昭二二)、「元人雜劇」(昭二三)、「唐代文學考」(昭二四・二五)、「文心雕龍研究」(昭二六)、「對偶法の研究」(昭二七)、「漢魏詩史」(昭二八—三〇)　などが、また小川教授により「語義沿革舉例」(昭二五)、「中國文學史序説」(昭二六)、「蘇東坡研究」(昭二七)、「中國小説提要」(昭二八)、「中國方言學」(昭二九)　などが講ぜられたほか、人文科學研究所入矢義高助教授は「魯迅野草」(昭二四)、「現代中國文學史」(昭二五)　を、教養部田中謙二助教授は「西廂記研究」(昭三〇)を講じた。その他河野六郎講師の「朝鮮語學概説」(昭二六)、橋本循講師の「明清文研究」(昭二七)、　小野忍講師の「現代文學史」(昭二七)、神田喜一郎講師の「中國文學書解題」(昭二八・二九)、増田渉講師の「現代中國文學史」(昭二九・三〇)、藤野岩友講師の「楚辭研究」(昭二九)、中村幸彦講師の「中國文學と日本文學」(昭二九)、徐新元講師の「紅樓夢」(昭二九)　が年年加えられている。

さらに講讀・演習は、吉川、小川兩教授が漢書列傳、説文解字注、楊盈川集、唐宋詩醇李白、魯迅小説、韋蘇州集、詩集傳、老舍殘霧、茅盾霜葉紅似二月花ならびに清代散文、宋代散文陸游、杜牧詩などを取りあげて毎年講ずるかたわら、時に人文科學研究所平岡武夫助教授、同入矢助教授、教養部西田太一郎助教授、同田中助教授、高木正一講師がそれぞれ助けている。

また副科目としての支那語は昭和十八年を最後に消滅し、二十一年度から二十五年度までは正科目の中に語學の課程がおかれ、倉石、小川、吉川三教授が相ついで擔當したほか、金子二郎講師、伊地智善繼講師、田中謙二講師はそれぞれ中國語初歩を講じた。なお二十五年以後は實習または外人實習の課題が加わり、吉川教授(昭二五)、黎波講師(昭二五—二七)、岳守謙講師(昭二八前)、金毓本講師(昭二八後)、徐新元講師(昭二九—三一)　がそれに當つて來た。

二十八年四月から開講された新制大學院文學研究科では、學部共通講義のほか、吉川教授による「中國文學に於ける人間の問題」（昭二八・二九）、小川教授による「中國文字學」（昭三〇）、神田喜一郎講師による「清代文章の研究」（昭三〇）などの研究および諸種の演習が講ぜられている。

かくて戰後から二十九年三月舊制の最後までに四九名の卒業生を出し、本講座開設以來一二五名に及んだ。また新制は二十八年三月はじめて二名の卒業生を出し、現在まで一四名に達している。なおこの期間舊制大學院には數名の中國人・アメリカ人が在學し異彩をそえた。

なお吉川教授は二十五年一月日本學術會議會員、二十七年四月國語審議會委員となつて現在に至つているが、二十九年四月には米國政府の招請により渡米、コロンビア大學・ハーヴァート大學などにおいて資料を調査するとともに、その中國語學文學の研究を視察した。

つぎに本研究室最近の業績としては、まず二十九年十月から雜誌『中國文學報』が發刊されている。教官・卒業生を主要な執筆陣としつつ、もつぱら中國文學に關する論文・書評・紹介を收め、吉川、小川兩教授を編集者とする半年刊として、すでに三册刊行した。その他、二十七年十月には研究室編の『王維詩索引』を、二十八年には東裝の土建宮詞百首箋注を謄寫印行した。なおこれよりさき、本學人文科學研究所が謄寫印行した清の徐松の登科記考索引、および清の勞格の唐御史臺精舍題名考・唐尚書郎宮石柱題名考の索引も、本研究室の原稿を用いたものである。

また本講座の藏書は、支那哲學史講座のそれと共同のものとして、同じ書庫に藏せられて來たが、二十七年九月には支那哲學史研究室と共同して、その藏書目錄稿本を謄寫版に付印した。それによれば、和漢洋合して約三千五百部五萬册に及ぶ。また二十五年一月に油印された近畿現存中國近人書目の作製にも本研究室が多く盡力した。

關係學會としては、「中國語學研究會」が、倉石教授を中心とする全國有志の會合として組織され、昭和二十一

年十月以後、毎月例會を開き、本學の教官卒業生もしばしば發表を行なつて、倉石教授の東京大學轉任に及んだ。また、二十四年十月全國的な學會として結成された「日本中國學會」には吉川、小川兩教授が、二十一年に成立した「東方學會」には吉川教授が、ともに理事として參加するほか、吉川教授は東方學會京都支部長となつている。なお支那學社の發刊した『支那學』は二十二年八月第十二卷第五號をもつて終刊し、同じ月に青木教授の主唱により『東光』が創刊されたが、二十四年三月の第八號をもつてやんだ。さらに現在研究室には大學院學生を幹事とする「中國文學會」があつて、二十四年十月以來、現在まで四十一回の例會を開き、教官卒業生の研究發表を行なつている。

本講座半世紀の歴史を貫くものは、實事求是の精神であつて、新しい資料と新しい見解を尊重しつつも、新奇に馳せることなく、精細な讀書と着實な鑑賞とを學風の中心として來た。今や過去に蓄積された資料と見解の上に立ちつつ、他講座との連絡をより密にし、より廣い視野から中國文學の精神と中國語の本質を解明することが新しい課題となりつつある。

西洋文學第一講座（ドイツ語學ドイツ文學）

本講座は明治四十年五月に設置されたもつとも古い講座の一つで、藤代禎輔教授、エミール・シラー講師、成瀬清講師らによつて、明治四十一年九月最初の授業が開かれた。

講座の目的として、まずドイツ文學の歴史的な重要事項を正確に理解せしめ、その精神的な內容と價値とを闡明することが必須であるのはいうまでもない。そのために極端に一方に偏することは固く戒められた。藤代教授はドイツ文學（ことに十八、九世紀）の正しい鳥瞰圖を與えようと努力したが、その研究が推し進められて行くにつれ

て自然に一つの中心ができ、一つの道が開かれたのは自然な成行きといわねばならない。各年の講義題目や學生の卒業論文をみると、講座の發達に伴ない徐徐に展開せられた研究の、ある筋道が浮んでくる。

最初藤代教授は主としてドイツ戯曲の研究に力を注いだ。すなわち、レッシング、シラー、ゲーテ、ハインリッヒ・フォン・クライスト、ヘッベル、オット・ルードヴィヒ、グリルパルツァーなどの作品が繰返し講ぜられ、さらに下つてはリヒアルト・ヴァークナーやゲルハルト・ハウプトマンに及んだ。現在本研究室に備品として保存されているヴァークナーの珍しいレコードは、當時の蒐集によるものである。ドイツ世話悲劇は藤代教授の重要な研究題目の一つであつたが、それと並んで十九世紀の寫實小説、なかでもコンラット、フェルディナント・マイヤーとケラーの作品にも特別の注意が寄せられていた。

藤代教授の業績のなかでは、ゲーテ研究が非常に重要な位置を占めており、ゲーテの抒情詩と「ファウスト」の研究にはとくに力が注がれた。ある時はテオドール・フイッシャーの「ファウスト第三部」を演習のテキストに使用しているが、それは、ゲーテの「ファウスト」の複雜な詩形や難解な語句を根本的に討究するための一手段であつた。晩年の藤代教授は、ヴァルツェルなどのドイツ文藝學から暗示を得て、內面的形式についての獨自な思索を深めつつあつたが、昭和二年四月不幸業半ばにして逝去した。その著に『草露集』(明三九)、『文藝と人生』(大三)、『文化境と自然境』(大一一)、『鶩筆餘滴』(昭二)などがあり、いずれも教授の深遠な學識と多彩な趣味とを示している。また教授の講壇以外の業績として特筆すべきものは、その師フローレンツ博士との協力になる萬葉集のドイツ語譯であつて、教授の東京帝大卒業(明二四)直後、すなわちその二十四歳の時に始められ、明治三十三年九月萬葉集二十卷の中卷十二の一部を殘すのみで、全部を譯了した。譯稿はフローレンツ博士の許にあつたが、歐洲大戰の際その一部を失なつたという。なお教授が譯出にもつとも苦心したという卷五は『獨譯萬葉集第五卷鈔』と題して教授の十三回忌である昭和十四年に記念出版として刊行された。

藤代教授時代から協力したのは前記のほかに、フランツ・オットー、ヘルフリッチュ、片山正雄、ハンス・ユーバーシャール、雪山俊夫の諸講師であるが、大正十五年以降雪山講師によつて、「ニーベルンゲン」、「クートゥルーン」、「トリスタン」、「パルシファル」、「憐れなハインリッヒ」のほか、ワルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデなどのドイツ中世文學が講ぜられたことは、ユーバーシャール講師のドイツ音聲學の講義とともに、日本におけるドイツ文學研究に新分野を開拓したものというべきである。また當時の本學部の機關誌『藝文』は、ハインリッヒ・フオン・クライストの百年祭を記念して「クライスト號」（明四四）を、ヘッベルの生誕百年を記念して「ヘッベル號」（大二）を特輯した。これらも往年の『帝國文學』の「シラー特輯號」（明三八）とともに特記されるべきものである。

藤代教授の後を襲つたのは成瀬助教授で、大正八年八月本學助教授に任じ、のち昭和五年十月教授に昇任した。成瀬助教授の講義の中心が依然レッシング、ゲーテ、シラー、ハインリッヒ・フォン・クライスト、オット・ルードヴィヒ、グリルパルツァー、ゲルハルト・ハウプトマンなどにあつたことは、研究の傳統をそのまま受け繼いだものといえるが、ヘルダーリンやホフマンを加えるとともに、アンツェングルーバー、シュニッツラー、ヴェデキントなどを講じたのは、從來の基礎の上に置かれた新しい建設というべきである。またしばしば演習のテキストとしてディルタイ、グンドルフ、ヴァルツェル、コルフ、シュトリッヒなどの論著が用いられたのも、在來のドイツ文藝學研究の繼承と見られる。

これよりさき、成瀬助教授は大正十年から二年間獨・米に在留して、つぶさに世界大戰後の文藝の動向を視察し歸朝後、表現主義を中心とする現代ドイツ戯曲の研究に主としてその力を盡したが、他方その精神的系譜を求めてビューヒナーやグラッベに遡り、浪漫派を經て疾風怒濤期にまで研究を擴げた。これは十八世紀以後のドイツ文學に現われた非合理主義を總括する體系的研究であり、それを後年著書としてまとめたものが『疾風怒濤と現代ドイ

ツ文學』(昭四)であつた。この方面の研究としては詳細に個個の作品を取り扱い、方法論としても非常にすぐれた業績を示している。常に現實的な文學の動向に對して關心を失なわないのが、成瀬教授の特色でもあつて、自然主義・新浪漫主義・表現主義・新卽物主義から民族主義に至るまで、數多くの作家がつぎつぎに取り上げられた。すなわちトーマス・マン、ヴァッサーマン、ケラーマン、ヴェルフェル、デープリン、コルベンハイヤー、ヨースト、カロッサ、ファラダなどである。

なお成瀬教授時代から三浦アンナ講師がゲオルゲ、リルケなどを、ローベルト・シンチンガー講師がドイツ神祕思想を、エルヴィン・ヤーン講師が主としてドイツ文藝學を講じ、內山貞三郎、大山定一、石川敬三各講師も、それぞれ專門とする中世戲曲史・リルケ研究・ドイツ語學において協力した。

つぎにここに附記すべきは、昭和五年ライプツヒ大學と本學との間に學生交換の契約が結ばれ、戰爭によつて中斷されるまで、本講座專攻卒業生からはつぎつぎと板倉鞆音、山口繁雄、大賀小四郎が派遣されたことである。そしてドイツから派遣されて來た諸學生は大學院演習に出席し、共同の研究に參加した。なお大學院の演習は、昭和六年以降とくに大學院學生の讀書力を高めるために始められたものである。

本講座は「英文學會」・「フランス文學會」のような定期的研究發表を行なつていなかつたが、これに代わるものとして成瀬教授を會長とし、雪山講師および東京帝國大學木村謹治教授を副會長とする「日本ゲーテ協會」(昭六創立)と內面的關係を持ち、同協會の年鑑編輯、年次大學公開講演などに協力し、また本學に近接するドイツ文化研究所(昭九創立)に對して人事の交流・事業の相互援助などを行なつていた。しかしこれらの事業が、戰後さまざまの事情により休止のままに置かれていることは殘念である。なお卒業生有志の手に成る季刊雜誌『カスタニエン』(昭八・一—昭一三・一)が、主として現代ドイツ文學の研究・紹介に努めたことも記憶さるべきであろう。なお昭和十五年度までの卒業生總數は一五八名である。

昭和十六年十二月わが國が太平洋戰爭に突入して以來、本講座も學生の動搖ならびに減少、貸出圖書の燒失など種種の影響を受けたが、研究はもとより弛むことなく、成瀨教授を中心とし、大山、三浦、石川、ヤーン各講師によつて學生指導が強力に推進された。

まず成瀨教授は近代ドイツ文學史を「ゲーテ死後のドイツ文學」(昭一六)、「十九世紀ドイツ文學」(昭一七前)、「現代ドイツ文學」(昭一七後)に分かつて逐次講じ、さらにそれを補うに「古典主義と浪漫主義」(昭一八)をもつてした。これらはいずれも普通講義として、ドイツ文學を支配する近代の主潮を傳統的發展的にとらえつつ、ドイツ的本質を闡明しようとするもので、學生に準備的知識として廣い歷史的視野を開かせるに大いに役立つた。また教授は特殊講義として「ドイツ文學に現れた自然と自然人」(昭一七前)、「ドイツ文學における北方と南方」(昭一七後)「告白としての文學」(昭一八)などの問題を取りあげ、絶えず角度を變えつつ、文學全般に横たわる風土的民族的人間的諸相を根元的に把握しようと努めた。さらに永年にわたりゲルハルト・ハウプトマン、グリルパルツァー、レッシングその他の數多い戲曲を演習し、劇文學の方面にも興味深い研究指導を續けた。

こうして藤代教授の後を承け、本講座の充實に力を注いだ成瀨教授は、昭和十九年の「詩的寫實主義」の講義を最後に、二十年四月停年により退官、本學名譽教授の稱號を贈られたが、教授在任中の主要課題は、ドイツ文學における人間像の追究にあつたともいえよう。その面目は『文學に現れたる笑の研究』(大六)、『人生戲場』(昭九)、『人間凝視』(昭九)、『無極隨筆』(昭九)などの隨筆集にも鮮やかに窺われ、またすぐれた飜譯も多い。

この間にあつて、成瀨教授を助けた大山講師は、現代文學とりわけリルケの研究を深めた。特殊講義に「リルケ」(昭一六)、「リルケと造型美術」(昭一七前)を論じ、リルケ「ロダン論」(昭一七後)を講讀したのは、その現われである。現代ドイツのもつとも代表的な詩人の一人として近年とみに世界注視の的となつてきたリルケを、同講師がどのような態度で理解に努めていたかは、これと併行的に行なつた特殊講義「ドイツ文學における實存の問題」(昭一

七前」がはつきりと答えていよう。苛烈な戰爭下、それだけに一層眞摯になされたこの研究は、本講座に清新な生氣を吹込み、のちに本講座を特色づけるリルケ復興を招來する。大山講師はさらにトーマス・マン、カロッサなどにも眼を向け、新しい文學動向を探ることを怠らなかつたが、しかもそこでの成果が期せずして同講師のゲーテの全人間像樹立を準備したかのように、その考察は絶えずゲーテに立ち歸り「親和力」、「ファウスト」および詩作品を講じて、のちの充實したゲーテ研究の基礎を固めた。なお特殊講義は「近世ドイツ文學批評史」(昭一八)と題し、啓蒙主義時代をおもに對象としつつ、文學批評の本質を究明し、學生に文學研究態度の基本を考えさせようとしたことも特記されなければならない。

三浦講師は「ドイツ文學における新神祕主義」(昭一六)、「ゲルマン神話」(昭一七)、「ドイツ中世文學」(昭一八)の特殊講義により、とかく閑却されがちな分野に對して注意を喚起するとともに、詩學および韻律學に關しても、ヤーン講師とともにしばしば解説的講義を繰り返し、學生の知識の不足を補なうことに大いに努めた。なおヤーン講師のおもな特殊講義としては「ドイツ文學に現れたイタリー」(昭一六)、「文藝學の歴史と方法」(昭一七)が擧げられる。また石川講師はハルトマン・フォン・アウエの諸作品や「ニーベルンゲンの歌」などを通じて、學生に中高ドイツ語を體得せしめ、十七年度には小牧健夫講師が「ドイツ浪漫主義」について特別講義した。

この間の卒業生は九名、その卒業論文のうちに目立つのは、ゲーテおよびカロッサを扱つたものが各二篇あることである。

さて敗戰に伴なつた思想の混亂、社會情勢の動搖と不安のさなかにあつて、本講座も成瀨教授のあと主任教授を缺く苦しい時期を過したが、やがて大山講師が二十一年二月助教授に任ぜられて本講座を擔當し、まず新構想による研究陣容の充實と研究意欲の高揚に鋭意努力した。さきにも協力を得た小牧健夫講師に「十八世紀ドイツ文藝思想」(昭二一)、「ドイツ自然主義の文學」(昭二二)、「浪漫主義の問題」(昭二三)とその各研究を依囑し、また學制改

革を機に昭和二十四年度からは、教養部から谷友幸、高安國世兩助教授の來講を求め、かくして本講座は大山助教授を中心に、清新活潑な氣風が漲るに至つた。

最初に大山助教授は、「近世ドイツ文學思想史」を例年講義しつつ、演習にはハイネ「ドイツ・冬物語」（昭二一）カッシラー「クライストとカント哲學」（昭二一）、ニイチェ「生に對する歴史の利害について」（昭二五）などをテキストに用いたが、その意圖は、單なる從前のありふれた審美的な文學史的概觀にあきたらず、ドイツ文學を通して、近代における人間の存在基盤を、その精神構造と思想の問題から確めようとするものであつた。それがいかに獨自な深い洞察のもとに行われたかは、一例をあげれば、一般に自然とのつながりも持たず、單に甘い感傷に過ぎないとされているハイネの抒情詩が、辛辣な大膽不敵ないつわりない近代詩人のものであることを見事に剔擇した『ハイネ論』（昭二三）のごときがはつきり示している。

しかし大山助教授のもつとも心を用いたのはゲーテである。「わが生涯から」（昭二〇演習）、「ファウスト第二部」（昭二〇演習）、「ゲーテにおける世界文學の理念」（昭二一研究）、「ファウスト序說」（昭二一講義）、「西東詩篇の研究」（昭二二研究）、「ファウスト第一部」（昭二三演習）、「ズライカの卷の研究」（昭二四研究）、「ゲーテの抒情詩」（昭二四演習）、「ファウストの死と救濟」（昭二五研究）などと、つぎつぎに研究は積み重ねられて、「ファウスト」と「西東詩篇」を二つの軸として、老ゲーテをめぐつて次第に考察の輪は絞られていつた。

また、同助教授の早くからのリルケ研究は、さらに「ドゥイノ悲歌」（昭二二演習）、「リルケにおける神の問題」（昭二三研究）に結實された。詩人の中に現代の嚴しい人間位相をぎりぎりの立場において把えようとするこの研究は、ホーフマンスタール「アンドレアス」（昭二三演習）、カフカ「アメリカ」（昭二四演習）などにも共通する。文學のジャンルから見れば、抒情詩および抒情詩史の問題が次第に本講座の主要な研究對象となりつつあつたが、大山助教授の「飜譯の技術と方法の爲に」（昭二五）と題する獨自な演習も、全歐における古今の詩篇について、その原

典とさまざまな獨譯を一つ一つ比較檢討しながら、抒情詩の本質を見極めようとする試みであつた。またこうした事情のもとに、抒情詩および抒情詩史に對する關心を決定的に促進したのは、谷助教授による「フリートリヒ・ヘルダーリン論」（昭二四）と高安助教授による「シュテファン・ゲオルゲ論」（昭二五）の兩研究であつた。

つぎに成瀨教授時代から戯曲を多く取り上げてきた三浦講師は、二十一年度以後、毎年「マリア・ストゥアルト」「ドン・カルロス」、「ヴァレンシュタイン」と、シラーの研究にとくに力を注いだが、また古來のドイツ抒情詩を例年講じ、本講座の新しい動向を助成したことも見逃せない。また長らく中高ドイツ語の講義を受持つてさた石川講師は、二十三年度「ニーベルンゲンの歌」を最後に、三十一年度までしばらく本講座から退いた。なおこの間とくに多く論ぜられた作家は、以上述べたほかに、レッシング（大山・谷）、クライスト（大山・谷）、トーマス・マン（大山・高安）などがあげられる。

この時期の卒業生は總數二一名、卒業論文のうち、ゲーテを扱つたもの四篇、シラーおよびトーマス・マンが各二篇あるのが目立つている。

未曾有の學制改革とともに、新制度による授業はすでにその一部が併行的に始められていたが、その講義體制が本格的に整つたのは昭和二十六年度以降である。すなわち、本講座では大山助教授が二十五年三月教授に昇任し、この大山教授を中心に、教養部の谷、高安兩助教授、三浦アンナ講師がこれを助け、主としてドイツ文學を講授してきたが、この年度からはさらに教養部古松貞一教授、二十七年度からは本學專任として來任した鹽谷饒講師が參加して主にドイツ語學を擔當し、また專攻課程への準備段階として新たに教養部教官の協力により、講讀(一)、ドイツ文學史(一)の補助課目を設け、後者には二十六年度以後引き續き教養部吉田次郎教授が來講することとなつた。ついで一十八年度からは新制大學院も發足し、修士課程の講義も始められて、舊制度から名實ともに切り換えられ今日に至つているが、その間本講座は講壇を通じ、あるいは著述を通じ、つぎつぎと重要な業績を發表し、わが國に

おけるドイツ文學研究に多大の寄與をなした。

その第一に擧げられるのは大山教授のゲーテ研究である。「ゲーテ研究」（昭二六研究）、「グンドルフのゲーテ」（昭二六演習）、「西東詩篇の新研究」（昭二七研究）、「ゲーテと僕らの將來」（昭二八研究）、「ゲーテの詩」（昭二八演習）、「若きヴェルテルの惱み」（昭二九演習）、「ファウストの死と變容」（昭二九大學院研究）、「西東詩篇」（昭三〇演習）、「ファウスト第二部」（昭三〇大學院演習）と、同教授の考察はたえずゲーテをめぐりつつ、年とともにますますその研究は圓熟味を加えた。ことに數年來宿題として取り組んできた「西東詩篇」、および「ファウスト」に關する研究はブールダハ、エーリヒ・シュミット、ペッチュ、ヴィトコウスキーなどの基礎的業績の上に、ピュリツ、ハンス・ハインリヒ・シェーダー、ヴァイツ、あるいはボイトラー、トルンツ、シュタイガーなどの戰後の重要な新研究をもれなく酌み入れ、その對決精神のはげしさ、考證の嚴密さ、理解の深さは、わが國におけるゲーテ研究の中でも比類をみぬものといえるが、その一端は刊行された『鷗外譯ファウスト註解及解說』（昭二四）に明らかに窺われる。しかも教授は、文學における思想的要素を重視する戰後の新しい研究動向に對してもいちはやく眼を向け、あるいはルカーチ「ゲーテとその時代」を論じ、あるいはハイデッガー「ヘルダーリン解說」を演習に取り上げるなどして、その社會的乃至哲學的視角の新しさ、洞察の鋭敏さを從來の文學研究への反省として高く評價しながらも、基礎研究の不足と研究方法の不自由さを指摘して考慮の餘地をさらに未來に殘したごとき、あるいは戰時下いちはやく文學における實存の問題に興味を向けながらも、以後はかえつて深くゲーテの文學に沈潛したごときは、あくまで詩と詩精神の純粹さを守り拔こうとする、正統な抵抗の現われであつたのかも知れない。三十年度の「抒情詩の本質のために」と題する研究も、教授のかかる決意を裏書きするものといえよう。

谷助教授による「パリにおけるリルケ」（昭二六）の研究は、さきに發刊されて海外にも紹介された若きリルケを描く『リルケ傳』（昭二三）の繼續とも見られるもので、いわば不安を造形する中期のリルケの藝術的苦業を、「新

詩集」、「マルテの手記」、「鎭魂歌」などに綿密な考證と分析を加えながら解明しようとしたものである。また同助教授は、以前からのヘルダーリン研究を、ふたたび二十八年度およびその翌年度の連續研究「後期のヘルダーリン」に示し、その間の研鑽のほどを明らかにした。今回はバイスナー監輯のシュツットガルト版全集を底本とし、プロピーレーン版を隨時參照して、ヘルダーリン後期の難解な祖國詩篇に讀解を試み、グァルディニ、コメレル、ベックマン、エルンスト・ミュラー、ヴァルター・F・オットなどの學說を顧みながら、この宗教的詩人の姿を時代の運命において把えようとするもので、困難な問題に極めて行き届いた解釋を示し、ヘルダーリン研究への新しい道を拓いた。

これはその譯著『悲劇エムペードクレス』(昭二八)に附した註釋および解說にも窺えよう。またかかる同助教授の特色は「ホーフマンスタールとカフカ」(昭三〇研究)と題するホーフマンスタール研究にも發揮された。これは二十三年度の「アンドレアス」に始まり、「騎士物語その他」(昭二九演習)に至るまでの大山教授の研究に呼應しようとするもので、從來わずかな批評家の間でしかその眞價を認められなかつた晩年のホーフマンスタールに新しい照明を投じ、その光のもとに初期の詩篇や小戲曲を改めて見直しつつ、現代の苦惱を最後的に克服せんとした詩人の偉大な意義を認めるものである。このような意味では、この間に採り上げられた他の古い作家たち、たとえばレッシング(大山)、ハインリヒ・フォン・クライスト(大山・谷・高安)、ホフマン(大山)、ビュヒナー(高安)、ケラー(大山)などもこうした全く新たな觀點から取り扱われていることを特記すべきである。

高安助教授は、さきのゲオルゲ研究からさらに轉じて、宿題としてきた後期リルケの研究に力を注いだ。かつて好評を博したリルケ『ロダン論』(昭一六)の譯者であり、またアララギ派の歌人でもある同教授は、カタリーナ・キッペンベルク、グァルディニ、フランツ・J・ブレヒト、あるいはクロイツ、ディエター・バッサーマン、ボルノーなど戰後の新しい諸說を酌み、あるいは批判しつつ、自らのみずみずしい感覺をもつて、「オルフォイスへの

ソネット」（昭二八）、「ドゥイノ悲歌」（昭三〇）と、晩年のリルケの難解な二大作の正しい把握を志した。すでにその努力の一部は實作者らしい深い共感と、言語に對するすぐれた理解を、飜譯ならびに註解「オルフォイスへのソネット」（昭二九）に結實させている。また二十七年度の同助教授の研究「十九世紀抒情詩」は、ゲオルゲの撰した詞華集「ゲーテの世紀」を基にし、同年度の谷助教授の「ヴェッソブルンの祈り」以後クロプシュトックまでを扱つた演習「ドイツ詩選」と呼應して、十九世紀の主要詩人の作品を現代の詩觀から再檢討しようと企てたものである。一つ一つ丹念に詩作品を討究しながらつねに純粹な言葉そのものから出發し、容赦なく作品の中核に迫り、しかもかえつてそこから文學史的に、また詩論的に新しい問題が提起され解決されるという本講座の基本的な研究態度はかかる提携にも現われていよう。

三浦講師の近代劇研究は、さらにその範圍を擴げ、シラー（昭三〇）、ゲルハルト・ハウプトマン（昭二八）、ヘッベル（昭二六）や、グリルパルツァーとライムント（昭三〇）、北歐近代劇（昭二七）などを對象とし、また「劇場史概說」（昭二六）を講じて、その極めて適切な指導により、この方面における學生の知識の不足を補なつた。

右のドイツ文學關係に對して、ドイツ語學關係を擔當した古松教授と鹽谷講師は一層本講座を整備せしめた。すなわち古松教授は多年の蘊蓄を傾けて「文法的諸形態」（昭二六）を講述し、文學研究の少なからざる盲點を是正することに寄與するとともに、「ドイツ韻律學」（昭二八）を講じ、ホイスラー「ドイツ詩法」を演習にとり上げて、その多年の造詣と堅實な考察は詩研究への基礎を用意するものとして極めて有益であつた。また鹽谷講師は三十年四月教養部助教授に轉じたが、授業を擔當し、例年「ドイツ語史概說」を講ずるかたわら、すでに久しくルター聖書の言語研究に鋭意主力を注ぎ、その成果の一部を「近代ドイツ語の音韻と形態」（昭二八）に講じた。

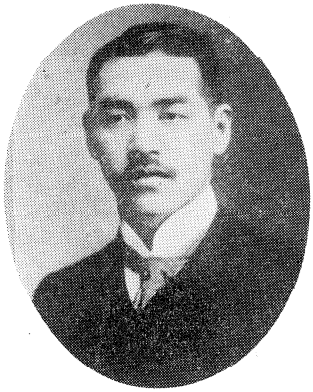
なお外來講師としては、東京大學原田義人助教授が「二十世紀小說の方法」（昭二八）に關し、東北大學會津伸助教授が「ヘルダー」（昭二九）に關しそれぞれ集中講義を行なつた。

昭和二十六年度以降の卒業生總數は七三名、うち舊制四三名、新制三〇名で、その卒業論文の目立つた傾向は、つぎの作家別による數字から明らかに知られよう。

トーマス・マン（一三）、ゲーテ（一一）、リルケ（八）、シラー（四）、カロッサ（四）、ヘルダーリン（三）、ニイチェ（三）、カフカ（三）、レッシング（二）、E・T・A・ホフマン（四）、H・V・クライスト（二）、ハイネ（二）、フリードリヒ・ヘッベル（二）、ゴットフリート・ケラー（二）、以下略

西洋文學第二・第四講座（英語學英文學）

西洋文學第二講座として本講座が開設されたのは明治四十一年五月であつた。その初代教授の人選は、もとより關係者の深く意を用いたところであつて、はじめ、當時の木下總長は、外人教師に適任の人がないのを理由として、西洋文學講座の設置そのものに懷疑的であるとさえ傳えられる程であつたが、文科大學としてはむしろ外人によらない外國文學の研究、教授こそ重要であると唱導し、かくして本講座の創設を見るや、その初代の擔任教授としては夏目金之助を選任することに決定した。しかしこの決定はのちに都合により變更を見、代つて上田敏（柳村）が教授に來任することとなつた。上田教授は明治四十一年十一月來任以後、主としてイギリスの近代文學、とくに詩および劇について、西洋文學一般に關する該博な知識に裏づけられ、豐富な詩才に彩られた流麗な講義を行ない、そのかたわら「京都文學會」の組織、およびその機關誌『藝文』の發刊にも參畫し、また自らもそれに「綜合藝術」な



上田教授

どの清新な文章を發表して世の注目を浴びるなど、多彩な活動を續けていたが、大正五年七月突然四十三歳の若さをもつて長逝した。文科大學創設以來最初に蒙つた不幸として忘れ難い。なお本講座關係者の研究團體である「英文學會」が組織されたのも上田教授在任中の明治四十四年であつた。

島教授

厨川教授

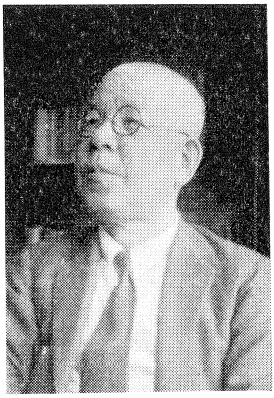
本講座は、上田教授の死後その年九月新たに囑託されたエドワード・クラーク講師、および上田教授在任中からすでにその任にあつた島文治郎助教授、厨川辰夫講師によつて分擔されることとなつた。そしてクラーク講師は大正十年教師に、島助教授は同七年七月兼任教授に、厨川講師は同六年五月助教授、さらに八年六月教授へとそれぞれ昇任した。そして厨川教授は新鋭の氣をもつて事に當らんとしていたが、十二年九月の關東大震災に當り、鎌倉において悼ましくも海嘯の犧牲となつた。

またクラーク教師は、引き續き任にあること十八年、昭和九年三月滿期解囑となり、まさに英本國に歸國しようとしてにわかに病歿したが、同教師の溫厚にして理解ある指導のもとに、本講座はこの期間に潑剌たる發展ぶりを示した。本講座專攻の卒業生などが大正十四年十月以來、雜誌『ミューズ』を發行し、單に學界だけでなく、當時の一般讀書界に清新の氣を注入したことなどもその一つである。なおクラーク教師の歿後、夫人の手によつてその藏書五一三三册が本學に寄贈され、中には珍籍稀書も少なくなく、今日に至るまで研究上多大の便宜を與えていることは特筆しておかなければならない。

『ミューズ』は昭和六年に廢刊となつたが、昭和八年に發刊されて現在に及んでいる『アルビオン』は、ある意

味においてはその後繼誌とみることもできる。ただ『ミューズ』が同人誌的色彩を帶びていたのに對し、『アルビオン』は創刊以來號を重ねるにつれて、英文學會の機關誌としての性格を濃くし、前者がいわば趣味的鑑賞的であつたのに比し、後者はより學問的研究的である。この差異はまさに本講座の學問的成長を物語るものといえようがその發展にあずかつて力のあつたのは、石田憲次教授獨自の學風であつたことは萬人の認めるところであろう。

石田教授は大正十二年十一月講師となり、翌十三年十二月助教授、昭和九年教授に昇任して、新たに增設された西洋文學第四講座を擔任した。教授は大正五年の本學卒業であつて、ここに本講座は創設以來二十六年にして、はじめて自らの卒業生を主任教授として迎えることとなつた。教授の學問上の業績は、これを便宜上三つの部門乃至は時期に分けて考えることができよう。第一の部門に屬するものは、學位論文である『ジョンソン博士とその群』(昭八)、『基督教的文學觀』(昭七)、『バーナード・ショオ眞髓』(昭八)、『ニューマン評傳』(昭一一)、『信仰告白』(昭一二)などである。これらの著作において、教授は單なる研究のための研究や、鑑賞のための鑑賞をもつて滿足せず、眞摯な實踐的精神に立脚して、批判的選擇的に英文學に對決しようとする獨自の文學觀を披瀝した。第二の部門に屬するものは『英國文化史概論』(昭一一)、『英國と英國民』(昭一七)、『近代英國の諸斷面』(昭一八)などであつて、上述の文學觀の當然の發展として、ここでは英文學がその社會的・文化的背景との連關において綜合的に把握されている。第三の部門に屬するものは、『英文學—感銘と考察』(昭二四)、『アメリカ文學の研究』(昭二五)など主として終戰後の執筆にかかる論考である。これらにおいては、上述の學風がさらに一層圓熟した形において餘すところなく發揮されている。しかもこれらすべての部門を通じ、そのような學風が、ややもすれば陷りやすい獨斷乃至は作品疎外の誤謬を犯すことなく、あくま



石田教授

で作品そのものの忠實周到な味讀理解によつて裏づけられている。この二つの特徴が兩兩相俟つて教授の學問を博大にして堅實、學界稀にみるものとさせたのである。

教授は昭和二十六年三月一身上の都合によつて退官したが、前後二十八年の在任期間を通じ、ことに本講座としては極めて困難な立場に置かれた第二次世界大戰中を通じ、不拔の信念と意志をもつて研究と教育に專念し、本講座の學界における地位を確固不動のものとさせたのであつた。

石田教授在任期間中は、大正十年退官後も引きつづき講師の職にあつた島文治郎のほか、山本修二、深瀨基寛、矢野禾積、細江逸記、竹友雋雄、大塚高信らの諸講師が、相ついでそれぞれ專門の分野について講述するところがあつた。

石田教授退官の後を受け、本講座は中西信太郎教授の主宰するところとなつた。すなわち中西教授は、昭和九年講師となり、同十三年三月助教授に任ぜられ、次いで二十四年教授に昇任、西洋文學第二講座を擔任して主としてシェイクスピアを題材とする講義・演習を行なつている。中西教授の學位論文である『シェイクスピア批評史研究』（昭二四）は、十七世紀以降現代に至るシェイクスピア批評の趨勢を問題史的・重點的に檢討するとともに、それによつてこの大劇詩人の眞髓に肉薄しようとした力作である。最新の動向に敏感に反應しながら、同時に古きを探ることを忘れず、纖細な感性と多年の蘊蓄とを晶明な行文に托したこの著作は、さきに刊行された『シェイクスピア序論』（昭一四）、『ハムレット』（昭一四）とともに、わが國のシェイクスピア研究に鮮やかな新生面を開き、新紀元を劃したものである。中西教授のもとにおいては、矢野禾積、山本修二、深瀨基寛、堀正人、小林象三、池田義一郎、老田三郎、山本忠雄、村上至孝、工藤好美の諸講師が來講し、また昭和二十六年六月からは御興員三助教授が、同二十八年五月からは菅泰男助教授がそれぞれ來任して現在に至つている。

第二次世界大戰中は、有形無形の壓迫下に極度に減少した學生數も、戰後急速に增加し、現在は舊制・新制大學

院學生を含んで約一五〇名の學生が研修中である。研究の傾向としては、由來大した偏向の見られないことが本講座の特色であるが、強いていえば、戰後アメリカ文學に對する興味が增加したことが注目される。

英文學會も、戰時中はほとんどその活動を停止するのやむなきに至つたが、昭和二十五年公開講演會の復活、翌年の『アルビオン』の復刊を契機として、ふたたび活潑な活動を開始した。この間昭和二十三、四年および三十年にはエドマンド・ブランデン、二十六年にはG・S・フレイザー、二十九年にはD・J・エンライトの講演會をおのおの開催し、それぞれの意味において、現代のイギリスを代表する詩人の謦咳に接する機會を持つことができたのは得がたい收獲であつた。

西洋文學第三講座（フランス語學フランス文學）

本講座が設置されたのは大正十四年五月であるが、フランス文學という科目名は、文科大學開設當時の文科大學規程のうちに、すでに英文學・ドイツ文學と並んで正科目として掲げられていた。しかしこの科目の實質は、大正八年當時の第一高等學校太宰施門教授がフランス語學フランス文學研究のため在外研究員を命ぜられて翌年二月出發し、越えて十年十月フランスに在留中、本學助教授に任ぜられた時に芽生えたといえよう。太宰助教授は十二年二月歸國、四月から初めて正科目としてフランス文學を擔當し、專攻の學生を前に「フランス文學史」の普通講義と第一回講讀の各二時間の講義を開いた。翌年度には特殊講義「La Comédie humaine」と第二回講讀が加わり、翌大正十四年五月には、いよいよ本講座が西洋文學第三講座として設置されることとなつた。かくて太宰助教授は本講座所屬となり、科目においては三回生に課される演習が加えられ、全科目の組織が完備した。その後この五種目の講義はいずれの一つをも缺くことなく、むしろその時間數を增加した。

開講後間もなく、太宰助教授のほかに、つねに二、三の講師が囑託されたが、落合太郎、ロベール、ヴァグネル、ボノー、バレ、ガルニエ、ロートマン、イズレール、ベルトランの各講師で、なお落合講師は昭和六年三月助教授に任ぜられ、太宰助教授は同八年三月に教授に昇任したが、落合助教授はさらに十二年十二月教授に進むとともに言語學講座に轉じた。その後は伊吹武彦、市村惠吾、林憲一郎、モンティニーの各講師がそれぞれ太宰教授を助けた。

講義の中心目標は、いうまでもなくフランス文學のもつとも主要な時期、すなわち十七世紀と十九世紀であり、また文學様式の上では、その重要さから見て、古典戯曲・近代小説・批評・抒情詩などに攻究の主眼が置かれたのは當然であろう。さらにまた人と作品との配列からは、偉大な作家、すなわちこの民族の文學集團を代表してその特性を千古に輝かす最中心の人びとが、まず最初の研究對象として選ばれなければならない。この三つの指針に從つて、開講以來各講義の内容はほぼ一定したものであつた。

太宰教授

この期の普通講義は第一回生のために、廣くフランス文學一般の大勢を説述する目的のもとに、「フランスの言語及び文學の歴史概説」、「フランス文學史」、「十九世紀フランス文學史」などの題目を掲げ、主な時代に中心を置き、できるだけ正確な鳥瞰圖的知識を授けようとした。講讀は二年間にわたり、第一回生に課するものと第二回生に及ぶものとで、自ら使用テキストの性質、その製作年代を異にした。すなわち初年にはおもに十七世紀古典文學の代表傑作、ことにラシーヌ悲劇とモリエール喜劇、しかもそのもつとも特徴あるものが用いられ、第二回には他の重要な文學時期である十九世紀のものからその名作が講義された。シャトーブリアン、ローマン派の詩、ミュッセの戯曲、バルザック、スタンダールの小説、サント・ブーヴの

批評などである。しかし時にはやや遡つてルソーの書を解說し、また現代に近い作家のものが使用されたこともある。

つぎに主として第二回生に課せられる特殊講義は、一般の大勢敍說でなく、限られた特定問題についての考究敍述であつて、從つてあるただ一つの作、ただ一人の作家を採り上げて探究すること、あるいは一つの時代全部を特に詳しく論究すること、または詩・戲曲・小說・批評などの樣式別に、その一つを歷史順に眺めわたす方式など、ほとんど無限に題材の變化があるが、なるべく前學年に學生の學んだ講義內容と照合しながら、一年に一乃至三種類が行われた。それらの題目は講座開設以來、たとえば十六世紀のモンテーニュ、十七世紀のパスカルなどのモラリスト研究、古典悲劇總說、比較文學的にみた十八世紀とローマン時代、バルザックの小說、サント・ブーヴの批評、近代現代のフランス戲曲などが主なものであつた。演習は、第三回生に卒業論文を起草する準備のかたわら、深く原典を讀み、理解して味わう能力を伸ばすために設けられたもので、その目的にそう教材として、テーヌ、ブリュンチェール、バレス、モーラスなどの批評書がしばしば用いられたが、ブールジェ、エストーニェ、ボワレーヴなどの現代小說、キュレル、ドネーなどの現代戲曲の選ばれたこともあつた。

さて戰後の昭和二十四年五月、太宰教授は停年により退官、その後は當時の第三高等學校伊吹武彥、生島遼一兩教授が講師となつて授業を擔當したが、伊吹講師は昭和二十五年四月本學教授に轉じ、本講座を擔任することとなつた。そこでまず考慮されたことは、わが國におけるフランス文學研究が戰後著しく進步發展しつつあるのに鑑み授業內容を飛躍的に充實することであつた。もとより本講座開設以來の精神—すなわち十七世紀の古典作家を中心として十九世紀作家に說き及ぼすという方法は、不動のものとして繼承されたが、しかし十八世紀の重大性や現代の重要性を無視することはできないので、本學人文科學研究所桑原武夫教授、および教養部生島遼一教授を授業擔當として新しい發足をすることとなり、さらに昭和二十六年度からは教養部のフランス語を擔當する田中俊一、渡

邊明正、林憲一郎、本城格、後藤敏雄の各助教授五名が加わつて、研究・講讀・演習の各分野にわたり、かつてない充實ぶりを示すに至つた。なお中世文學の研究には專門の學者を必要とするので、二十八年度には東北大學有永弘人教授を、また十六世紀文學の研究についても、同樣の理由によつて東京大學渡邊一夫教授を招いて、それぞれ集中講義が行われたが、この種の試みは本講座開設以來はじめてのことである。

授業內容の充實は以上のようであるが、それと並んで注目すべきことは、戰後本講座專攻の學生が著しく增加したことである。附表にも明らかなように、從來は每年一名乃至十二名であつた卒業生が、二十八年度には舊制二四名、新制二〇名、計四四名の多數にのぼり、二十九年度には舊制六名、新制三三名の學生を送り出すに至つた。

これら多數の學生が提出した卒業論文の題目を通じて、その一般的傾向を見よう。太宰教授退官の年である昭和二十四年を境として、その前後により第一期・第二期と分ち、それぞれについて論文題目を時代別にすると、まず第一期は、

十五世紀（一）、十六世紀（三）、十七世紀（一七）、十八世紀（五）、十九世紀（三四）、〔ローマン派（一一）、寫實派（一九）、象徵派（四）〕、二十世紀（一〇）、その他（二）

となり、十九世紀作家の研究がもつとも多く、十七世紀古典作家のそれは半數であり、現代作家がこれにつづき、十五、六世紀・十八世紀に關するものは少ないことが分る。十九世紀作家のうちとくに多く取り扱われているのは、スタンダール（四）、フローベール（四）、その他の寫實派作家（九）であり、これに比してローマン派作家（六）は少なく、象徵派に至つてはわずか（二）に過ぎない。

つぎに第二期は

十五世紀（〇）、十六世紀（四）、十七世紀（一三）、十八世紀（七）、十九世紀（五一）、〔ローマン派（二）、寫實派（三一）、象徵派（一八）〕、二十世紀（五一）

のように、十九・二十世紀の作家研究が壓倒的である。十五・十六・十八世紀の研究が少ないことは第一期と比較して變りはないが、十七世紀作家に比して十九世紀・二十世紀作家の研究が多いのは、第一期とやや異なる傾向である。十九世紀においてはスタンダール（一一）、フローベール（一〇）の研究が比較的多いのは第一期と同樣であるが、象徴派の研究がボードレール研究を含めて（一八）となり、次第に數を增して來ていることは注目される。なお二十世紀作家のうちではジイド（一一）、ヴァレリー（八）などの研究が多い。

しかし眞の問題は何が題目として選ばれるかよりも、むしろ如何にしてその題目が扱われているかにある。最近二、三年間の傾向を見ると、文學的エッセーはほとんど影をひそめ、實證的な精密研究が本流となつたこと、とくに最近フランスの學界に地歩を確立しつつある文學の統計學的な研究が、幾人かの學生によつて採用されはじめたことをまず擧げねばならない。つぎに作家の文體を科學的に研究するいわゆる「文體論」の方法も、漸次試みられているのは特筆すべきことであろう。

最後に學界との關係について一言しよう。わが國におけるフランス文學研究者の團體としては「フランス文學會」があり、もつぱら東京において總會を開催、その內容も一、二の講演が行われるのみで、會員の本格的な研究發表はなされていなかつた。そこで伊吹教授らは昭和二十五年秋の總會を京都において開催することを申し出で、その年十一月、全國的な總會および一般の研究發表を行なうことに成功、當日「フランス文學會」は現在のように「日本フランス文學會」と改稱され、はじめて會則を作り、學會としての體制を整えるに至つた。このような學會發足のための機緣をつくり得たことは、本講座關係者のひそかに誇りとするところである。以來伊吹教授は同學會の評議員となり、さらに二十七、九年の兩度にわたり、主催者として京都で總會を開いた。なお三十年五月學會の近畿支部が正式に發足、伊吹教授は支部長に選任されて今日に及んでいる。また昭和二十九年十一月附をもつて伊吹教授はフランス政府から Officier de l'Instruction pubique に敍せられ、勳章を授けられた。

言語學講座

本講座の開設は明治四十一年五月である。それ以前、言語學はすなわち博言の學であるとする素朴な考えによつて一般に博言學と呼稱されていたが、すでに東京大學においても明治三十三年以來、その講座の名は言語學と改められ、本學においては、ほぼ妥當なこの名稱を最初から本講座に冠して爾來今日に及んでいる。

本講座は、各種の語學に對するその包括的な性質上、當初から他の講座の管掌する以外の主要な語學の講義・講讀を總括して來た。本學部開設當時に近い明治四十一年において、語學文學に關する諸講座は、本講座を除き、國語學國文學・支那語學支那文學・英文學・獨逸文學・梵語學梵文學が設置されていたが、それらの講座の管掌する諸言語以外の、フランス語・ロシア語・中國語・朝鮮語・ギリシア語・ラテン語などは本講座が管掌した。このほかアイヌ語は、當時わが國内におけるもつとも注目すべき異言語の例として、またその北邊に占める歴史的な地位の特殊性と重要性によつて、とくにその研究の進展が翹望され、開講が決定されていたが、この地において適切な人を得ることができなかつたために、金田一京助講師によつて、大正十二年および昭和十二年の再度講述された以外、當初から講義が連續的に開かれたことなく、助教授として泉井教授が特殊講義において言語の一般構造論を連講したとき、それにふれて概説したに止まり、ついに正式に連年開講して人材を育成するまでには至らなかつた。

その後、次第に管掌する言語もその數を增し、羽田亨助教授が本講座に所屬した大正二年から同十四年にわたつては、トルコ語概論、トルコ諸語形態論、ウラル・アルタイ言語學についての特殊講義が、ほとんど毎年實施され、その他それ以前から西洋の主要言語、ことにイタリア語・スペイン語がそれぞれ講師をえて授講された。のち次第にアジア各地の諸言語・南洋諸地域の諸言語・アラビア語・ヘブライ語などに及び、現在本學部において講授

されている外異の語學の數は、他の各講座の管掌するものを含んで、梵語・パーリ語・ラテン語・ギリシア語・イタリア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語・英語・ドイツ語・ロシア語・ヒンディー語・ペルシア語・アラビア語・ヘブライ語・中國語・朝鮮語・チベット語・蒙古語・滿洲語に及び、その範圍はほとんど古今世界の主要言語を網羅している。

これらはおおむね常置的に講授される語學で、時に講師の都合により多少の出入はまぬがれないが、今後ともその數は增加しても減ずることはないであろう。とくに西南・東南・中央アジアの言語は次第に人を得て開講できる態勢にあり、これらのほかにも、言語學の特殊講義または講讀において、主として言語學方法論講授の手段として、あるいは新研究法による成果の發表手段として、講義された言語も少なくない。とくに伊藤義教講師は、昭和十七年以降數年にわたつて中世ペルシア語・パフラヴィーの語學文學を講じて、前イスラム的ペルシアの言語と文學の狀態を講究し、泉井久之助教授は昭和十三年からの三回にわたる內南洋ミクロネシアの言語的實地調査の結果として、同十四年から「言語構造論」において、それらの言語にふれつつ、數年ミクロネシアの西部・中部・東部の比較言語學的研究を展開し、また關本至講師は二十七年度ドラヴィダ語を講じた。

なお本講座の統括する諸種の語學のうち、西洋古典語とイタリア語學のその後の動靜について附記しなければならない。西洋古典語のうちギリシア語は、開設當初から新村出教授、深田康算教授が、ラテン語は榊亮三郎教授、米田庄太郎講師、オリアンティス講師、厨川辰夫教授らが順次擔當したが、大正九年これらを專攻する田中秀央講師が來任して、ともにそれらを擔當するに至り、ついで昭和十三年五月には西洋文學第二講座が西洋古典文學の講座に充當されるに及んで、この兩古典語はその講座の管掌にうつり、その後西洋古典語學西洋古典文學講座として正式に設置されるようになつた。イタリア語はガスコ講師、黑田正利講師によつて講述されたが、のちイタリア語學イタリア文學講座の設置とともにその管掌に移つた。

現在本講座においては、本學およびわが國の文運昌勢のために、さしあたつてロシア語學文學・スペイン語學文學の各講座、ならびにアラビア文化を中心とする西南アジア史講座の設置が要望されている。

本講座は開設以來現在まで、新村出、落合太郎、泉井久之助三教授の擔當を經ている。まず新村出教授は、もと東京高等師範學校教授兼東京帝國大學助教授であつたが、本講座開設に先立つて、その擔任に豫定され、明治三十九年七月には言語學研究のため英・獨・佛三か國に留學の命を受け、翌年一月には本學助教授に任ぜられた。ついで同年三月渡歐の途に上り、四十二年四月に歸朝、五月教授に昇任して本講座を擔當、さらに六月には文學博士の學位を授けられた。そして四十二年九月、當時の新學期からは教授の言語學概論によつて、本學における最初の言語學の講義が開かれた。

新村教授

當時言語學に從事し、またこれに志す學徒は寥寥たるものであつたが斯學への關心は、西洋の言語學方法論の導入による新國語學の鮮明的確な研究の展開と、新視野の開現によつて、ようやく世の注目を浴びるようになつていたが、この新知識による開講は大いに學徒の關心をひくものであつたと想像される。新村教授のこの講義は、普通講義として言語學專攻生だけでなく、文學科全學生の必修となつていたが、以來昭和十一年の教授の退官に至るまで、一貫して講述された。講義の趣旨は、また一貫して歴史主義により、明確な史的方法の豐富な展開と運用を特色とし、年年斯學の內外における進展に伴なつて漸次內容に更改を加え、主として國語史學的分野において獲得された結果を交えながら、終始獨特の學風を發揮したものであつた。

新村教授は、前記言語學概論を講ずるかたわら、明治四十三年度から特殊講義として、國語研究法およびロマン言語學・印歐言語學の各概說を講じ、ついで四十四年の「ロマン言語學要說」以下、ゲルマン言語史（大二）、印歐

言語學ならびにウラルアルタイ言語學（大三―五）、音聲學（大一一）、印歐言語學およびロマン言語學（大一二）、國語語順論（大一三）、言語比較方法（大一四）、音聲史論（大一五）について、その一般をそれぞれ概說し、あるいはその大綱を說述した。大正の末期から昭和に入るころから、特殊講義もさらに一層その內容と方法に精密さを加え、「文法の理論的及び歷史的研究」（昭二）、「國語と近隣諸民族語との比較」（昭三）、「言語系統論」（昭四）、「語源研究法」（昭五）、「音聲史研究」（昭六）、「言語史學」（昭七・八）、「國語音聲論」（昭九）、「言語史理論」（昭一〇）、「語法史各論」（昭一一）などは、すべて教授永年の研究、とくに國語を中心として體得された言語研究の成果をそれぞれ凝集し、かつ特異の風趣とともに展述されたものであり、言語學の史的方法による實證的研究、ならびにそれの主として國語への適用の方途は、ここに燦としてその光輝を放つたものといえよう。また大正年間には、別に副科目講義として、「國語史學」（大元）、「國語の比較研究について」（大八）、「西人國語研究の歷史」（大九）、「琉球語の研究」（大一〇）があつた。また演習は、言語學界における知名の先進が展述した學說の檢討と、それによる學生の陶冶を目的とし、テキストとしてポジェジンスキー、パウル、イェスペルセン、サピアの各主要著作が選ばれた。

なお新村教授は在任中、明治四十四年十月、本學附屬圖書館長に任ぜられて退官まで及び、別に大正五年十二月には學內に「言語談話會」を起し、また昭和六年四月には學の內外をつらねて「近畿方言學會」を創立、古くは明治四十二年十一月における「國文學會」の創立に當つた。また昭和十四年には「日本言語學會」を全國に土唱して創立し、以後その會長として現在に至つているが、「日本音聲學會」もまたその統率のもとにある。教授の業績は以上にとどまらず、在任中とその後にわたり、國語史學・文法學・書誌文獻學・日本中世近世文化史、および東西交通史など廣範圍に及ぶ編著は枚擧に遑なく、『東方言語史叢考』、『東亞語源誌』、『典籍叢談』、『國語問題正義』、『言葉の歷史』、『國語學叢錄』、『日本の言葉』、『南方記』、『正續南蠻廣記』などのうち若干はさらに『新村出選集』四卷にも收載され、『海表叢書』、『萬葉圖錄文獻地理篇』の編集をはじめ、近年における『辭苑』、『言林』、『廣辭

苑』などの國語辭典の編纂も重要な業績である。教授は昭和三年學士院に列し、昭和十一年十月停年退官、名譽教授の稱號を授けられ、今日に至つている。

新村教授の退官に伴ない、昭和十二年一月、落合太郎助教授が西洋文學第二講座分擔から轉じて本講座を分擔し、同年四月から特殊講義において「ブレアルの意味論」を講じ、演習を指導して「言語學の諸問題」を論究した。落合助教授はその年十二月教授に昇任、以後本講座を擔任し、昭和二十一年十二月に至つて第三高等學校校長に轉じたが、その間、十七年十一月以降本學を去るまで學部長の職にあつて、戰時下多端の本學部および本學の行政に參畫し、その指導と籌畫よろしきを得たことは特記されねばならない。その間、教授は普通講義において斯學の人般を講ずるかたわら、特殊講義としては、十三年度「ブレアルの意味論」を續講、以後「ルナンの言語學說について」(昭一四)、「言語學の諸問題」(昭一五)、「文章の諸問題」(昭一六)、「フランス語の歷史的研究」(昭一七)、「フランス語音聲學」(昭一八)、「一般音韻論」(昭二〇)などを講じ、演習用書にはブリュノー、ヴァンドリエスが引き續き選ばれた。落合教授の在任は比較的短期間であつたが、その渟蓄蘊藏の學と高厲の風趣はよく學生を教導し、また東西の思想史、ギリシア以來の泰西の言語觀史においても大いに啓發するところがあつた。

つぎに泉井久之助教授は、昭和三年本學の卒業、同六年三月から講師として講讀を指導、十一年十月、新村教授退官と同時に助教授に任ぜられ、さらに二十一年十二月には文學博士となり、二十二年四月教授に昇任、本講座を擔當して現在に至つている。

泉井教授は講師として講讀を擔當した間、主としてフランス派の言語學とその方法論の導入紹介と批判に努め、昭和六年ヴァンドリエス「言語」、七年以降、史的ならびに比較言語學を攝取させるために、メイエ「史的言語學における比較の方法」(昭七)、「印歐諸語比較研究綱要」(昭八)、「史的言語學と一般言語學(第一册)」(昭九)、「印歐諸方言」(昭一〇)についてそれぞれ講じ、十一年度には、これらを綜合してメイエを主とする諸家の史的比較言

語學說について講述した。講讀は助教授就任後も繼續され、十二年にはメイエ「史的言語學と一般言語學（第二册）」、十三年同「ラテン語史概要」、十四年同「ギリシア語史要說」とソスュール「一般言語學講義」、十五年ハーフェルス「透解統辭論要綱」と「Varronis de Lingua Latina」、十六年ふたたびメイエ「印歐諸語比較研究綱要」とバイイ「一般言語學とフランス語學」、十七年バンヴニスト「印歐語名詞の形成起原論」、十八年フンボルト「人間言語の構造的種々性について」とファン・ヒネケン「言語變化の諸要因」とつづいたが、十九年以降はすでに十二年から始められていた特殊講義・演習にしばらく集中した。

すなわち特殊講義としては、昭和十二年度「印歐言語學における諸問題」と題して、二十世紀においてヤッタイト語の解讀以來新しい轉回を見せつつあつた印歐比較言語學界の現況を講述、十三年度は「言語構造論」を講じて翌年に繼續し、十三年夏内南洋トラック諸島に赴き現地に採錄調査したミクロネシア諸語の比較言語學的研究の一端を交えながら、言語一般における構造理論を展述した。泉井助教授は、前記内南洋ミクロネシア諸言語の現地採錄と研究を、十三年から十六年までの間、三回にわたつて中部・西部・東部の順で實施し、資料を蒐集した。かくて十五年度の特殊講義「南洋語の研究について」は右の調査によるマライ・ポリネシア諸語との比較言語學的研究の一部であつて、以後十九年まで四年にわたつて引き續き「ミクロネシア比較言語學」を講述した。

戰時中本講座においては、とくに新種の資料の入手に困難が加重したが、當時在任の落合教授のもとに、各種の講義は種種の支障を排して行われた。この間、泉井助教授は十七年十二月から翌年三月にかけて佛印各地に各種言語の現地調査を目的として出張し、その成果の一部によつて十九年度特殊講義にふたたび「言語構造論」を講じ、併せて「比較言語學概要」の題で、その比較方法論とその成果とを、印歐語ならびにマライ・ポリネシア諸語について講述し、後者は「比較言語學方法論」の題で翌年度につづいた。その後二十二、三年には「オデュッヤイアの言語學的研究」、二十三年には併せて「De Aristotelis Poetica」が講ぜられて、翌二十四年の「Aristotelis Rhe-

torica」に續いた。また同年は西洋古典語の研究、ならびに西洋古典時代における言語觀史の闡明に從い、二十五年の「日本語の系統について」は言語系統問題處理の一般方式とともに、日本語をフィノ・ウグール諸語に比較しようとする試論におけるその適用を說述したもので、同年別に「印歐言語學の諸問題」に論及し、これは翌年にも及んだ。二十八年には「Taciti Annalium liber I」、二十九年にはその後の研究の進展と戰後新資料の涉獵によつて、比較方法の適用を南島諸語全域に及ぼして、「マライ・ポリネシア比較言語學」を綜括講述した。三十年度は「ラテン語の研究」の題下に、プラトゥスの喜劇作品についていわゆる古典雅語ではないラテン語の性格の闡明に努め、一般に日常通用の言語が外顯し內包する性狀を追求したが、これは本年度に續講されている。

また泉井教授は昭和二十年以後普通講義を擔當しているが、その內容は單なる斯學の概說、またはその入門的性格に陷ることを避け、むしろ言語の一般的性格の闡明に志し、その間逐次斯學の概觀を與えることが意圖されている。この意圖のもとに、二十二、三年度は主として文學語の性格を內外の作品について說明、二十四年度は同じように詩語と詩律を資料とした。また同年米國に赴いて戰時中および終戰直後の交流杜絶乃至拘束によつて缺如した海外資料の補充、ならびに整理に努め、その成果がようやく成るとともに、研究領域の擴大・方法の深化など、全體に多大の變貌をみた世界言語學界の新風潮を加味しながら、二十五年以降逐次新問題を提起講述して現在に至つている。また二十一年以後擔當した演習には、アリストテレース、パウル、メイエ、イェスペルセン、バンヴニスト、ルークレーティウス、ブロック、トレイガー、ヴァルトブルグ、イェルムスレウ、アルヴンなどが主な利用文獻として選ばれた。また教授は、昭和二十四年十一月から本學附屬圖書館長に補せられて現在に及んでいるが、その他昭和四年にはパリ言語學協會員に推され、また「京都言語學談話會」を主宰し、前記近畿方言學會の後身である「近畿國語方言學會」の會長であるとともに、「日本比較文學會」の關西代表でもある。その主要な著書に『言語構造論』、『比較言語學研究』、『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト』、『一般言語學と史的言語學』、『言語民族

學』、『ラテン廣文典』、『古典と現代』、『南魚星』、『言語の研究』などがあるが、本講座内外の協力によりメイエ、コーアン監修『世界の言語』を補訂編刊した。

またすでに觸れたように、羽田亨は、早く大正二年東洋史學講座から本講座所屬助教授に移り、もつぱらウラル・アルタイ言語學、とくにトルコ語、またはトルコ諸語について特殊講義を行ない、翌三年ロシアに出張してウイグル語の研究をし、歸國後四・五年にわたつては、「ウフル・アルタイ系言語學」を講じ、ついで六年には演習において「ウラル・アルタイ語の數詞」につき指導した。なお併せて「トルコ諸語形態論」(大四)、「土耳古語」(大五)も講じた。その後八年七月には言語學ならびにウラル・アルタイ言語學研究のため米・英・佛およびデンマークの諸國に留學、十一年歸國後は、重ねて「ウラル・アルタイ言語學」を逐次その各部門について例年講じたが、大正十三年教授に進むとともに、東洋史學第三講座分擔に轉じた。しかし本講座の特殊講義は同じ題で翌十四年度にも行われた。

なおほかに、普通講義は、金田一京助講師が昭和十一、二年度にこれを擔當したことがある。また田中秀央助教授は本講座に屬して、大正十四年から昭和十四年まで西洋古典語および文學について講じていたが、昭和十四年三月西洋文學第二講座によつて西洋古典語學西洋古典文學講座が事實上成立するとともに、教授に任じてこれに移り、擔任となつた。現在イタリア語學イタリア文學講座を擔任する野上素一教授も、兼ねて本講座において昭和二十二年以來講師、助教授ついで教授としてロマン言語學・イタリア語學文學を講授している。

上記のほか、特殊講義においては、蒙古語・滿洲語に關して鴛淵一(昭六—一三)、國語音韻史について池上禎造(昭一五)、韻律論について小田良弼(昭一六・一七削)、音韻論について金田一京助(昭一七後)、滿洲語について三田村泰助(昭一七)、蒙古語について石濱純太郎(昭一八・一四・二五)および山崎忠(昭二八—三一)、中世波斯語について伊藤義教(昭一七・一八・二二—二五)、西藏語について佐藤長(昭二六)、朝鮮語について河野六郎(昭二六)および

鄭寅燮（昭三〇・三一）、ドラヴィダ語について關本至（昭二七）、近代ペルシア語・ヒンディー語について澤英三（昭二八）、フィノ・ウグール言語學について德永康元（昭二八）、セム諸語および一般意味論について井筒俊彦（昭二九・三〇）、パーニニの文典について大地原豐（昭三〇・三一）、シナ・チベット諸語比較研究について西田龍雄（昭三一）らの諸講師がそれぞれ講じた。また松平千秋助教授も西洋古典語學文學講座に屬しつつ、本講座においてギリシア語・ギリシア文學を講じた（昭二六・二九）。

以上のような言語學の基礎的理論、および比較方法論、記述方法論以外に、各種の語學の具體的研究も本講座では重視される。戰後、本講座には「語學」の項が設けられ、主として東方の言語の講授の充實につとめて來たが、一方文學科副科目に配分される諸言語講授についても、中國語・英語・獨語・佛語・梵語・パーリ語・西藏語など、それぞれの時期において、それぞれが歸屬する講座の存したものを除けば、すべて早くから右の「語學」とともに本講座の管掌するところであつた。いますでに特殊講義（研究）として記したものとの重複を除き、これら二類に屬する諸言語とその擔當者をつぎにまとめて列記する。

ギリシア語は新村教授（明四三・大四—八）、深田教授（明四四—大三）、ラテン語は榊教授（明四四・四五）、田村初太郎講師（大一・三）、米田庄太郎講師（大五）、オリアンティス講師（大七）、厨川教授（大八）であつたが、大正九年からは田中秀央助教授がこの二古典語を擔當、その在外研究中（大一一—一三）は、ラテン語をエルダー講師、ギリシア語を菊池慧一郎講師が代つて講じ、菊池講師はその後も昭和五年まで主として哲學科學生のためにこの授業を續けた。なおこの二古典語は田中教授が西洋文學第二講座を擔任した十三年以後はその管掌に移つた。別に昭和二十七年から三か年は泉井教授が語學としてラテン語を擔當した。

つぎに、ロシア語は三井道郎（明四三・四四）、小西增太郎（明四五）、山口茂一（大三—八）、目時金吾（大一〇・一一）、ネフスキー（大一二—昭三）、十時惟親（昭五—二四）、植野修司（昭二五—三一）の各講師、アイヌ語は金田一講師（大

一二・昭一二)、アラビア語は松本重彦(大一四—昭四)、林昂(昭一九—二二)、藤本勝次(昭二三—三一)の各講師、イタリア語はガスコ(大一五—昭七)、黑田正利(昭八—)の兩講師が擔當したが、昭和十五年イタリア語學文學講座設置後はそれに歸屬した。スペイン語、もしくは時に併せてポルトガル語は國澤慶一講師(昭一七・一九—三一)、滿洲語蒙古語は石濱純太郎講師(昭一八・二三—二五)、はじめ梵語梵文學講座に屬して行われて來た西藏語は、別に本講座管掌のもとに佐藤長助教授(昭二七—三一)がそれぞれ擔當して來た。

その他、昭和五年國史學講師として來學したデ・ローハ總領事が短時日間オランダ語を講じたこと、大正六年セイス教授が來學、考古學に關する特別講演を行なうかたわら、數回にわたりスメル語・アッシリア語研究について述べたこと、および明治四十三年から大正二年までの間に、地理學講座の中目覺講師がオロッコ語・ギリアーク語を授けたことなども本講座に關係することとしてここに附記する。

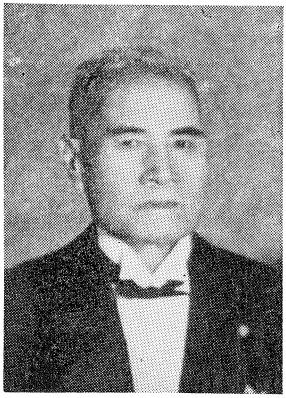
なお昭和二十八年から發足した新制大學院文學研究科においても言語學專攻が設けられ、西洋古典語學文學・イタリア語學文學兩講座を包括して毎年講義が行われて來たが、學部と共通のものを含めて本年度の講義を例示すれば、研究として泉井教授の「ラテン語の研究」、松平助教授の「古代ギリシアにおける文學と方言との關係」、「Cyclus Epicus」、野上教授の「西歐文學の傳統と交流」、「リゾルジメント文學」、鄭講師の「朝鮮語の研究」、關本講師の「近代ギリシア語の成立と構造」が、演習として泉井教授の「Sapir, Language」、「Bloomfield, Language」、「言語學の諸問題」および宮本幸三郎講師の「イタリア現代文學」、ベンチヴェンニ講師の「ダンテ文學」がそれぞれ講ぜられている。

本講座は創設から今日まで合計四七名の卒業生を出しているが、それら卒業生の卒業論文は、一般・特殊言語學の各分野にわたり、その特殊なもののうちには、國語學、方言學、琉球語學、朝鮮語學、印歐比較言語學、ギリシア語學(古典・新約)、一般ゲルマン語學、英語學、ドイツ語學、ロマン語學、フランス語史、スラヴ語學、セム語

學、悉曇學、シナ西藏言語學、マライ・ポリネシア言語學に屬するものなどがあり、また、文體論的な諸研究も含まれている。

梵語學梵文學講座

本講座の設置は、すでに明治四十一年の文科大學開設當初から計畫されていた。すなわちこれよりさき、榊亮三郎助教授は、梵語學研究のため文部省から在外研究員として二か年間、英・獨・佛三國に留學を命ぜられていたがその歸朝の途次、榊助教授はインド・ネパール兩國に入つて、多數の貴重な梵語寫本の文獻を蒐集したが、四十三年五月歸國すると、ただちに教授に任ぜられ、ここに本講座は名實ともに開講の運びとなつたが、この講座の開設は、當時のわが國學界としては、まさに劃期的な意味を持つていた。從來わが國において梵語といわれた古代インドの言語研究は、全く印度哲學や佛教學などの蔭にかくれ、その重要性が第二次的に考えられて來た憾みがあつたが、ここにこの古代言語の科學的研究が、今や印度哲學などをその一部に包含した廣義のインド文化の究明に、不可缺な學問と認められるに至つたのである。十八世紀以來西歐に勃興した梵語研究は、同時に比較言語學や比較神話學などの新しい學問を副次的に成立させる要因を造つたが、本講座が本學において文學科の系列に屬していることは、わが國の他の大學に見ない特徴であつて、そこに本講座設立者の學問自體に對する深い理解と、その英斷が察知できるとともに、また本學部の學問研究の性格を物語るものといえよう。



榊教授

梵語學の領域が、語學的にはそれがインド・ゲルマン語系であるだけに、西洋古典語や古代ペルシアの諸言語と密接な關連を持ち、同時に、南方インド・中國・西域・西藏の文化乃至は佛教などの深い知識と理解に及ぶべきを要請しているのは勿論であつて、榊教授のこの方面の研究に對する苦心と努力はなみなみではなかつた。榊教授は明治四十四、五年度においてみずからラテン語を講じ、將來本學に西洋古典講座を設立することの必要なことを早く垂示したが、さらにその講義に當つては、たとえば梵語および巴利語原典の講讀においても、つねに比較神話學、あるいは比較言語學の面から一語一句をも忽せにせず、ヴェーダ文學・一大敍事詩・プラーナ・戲曲文學などのインド文學の正統的なものから、その造詣深かつた漢籍および佛典の知識を利用しての佛教梵語は勿論、倶舍論・慈恩寺三藏法師傳などの講義にも及び、あらゆる角度から梵語學を正しい學問的軌道に乘せようとした功績は偉大なものであつた。また教授は留學中パリ國立圖書館の藏本であつたフウコオ、ジュリアンの手寫になる梵・藏・漢・蒙語の四譯對校の「飜譯名義大集」を底本とし、さらにミナエフ寫本のほか、諸種の梵文佛典ならびに漢譯についてその出典を確かめ、西藏大藏經とも對校して、『梵藏漢和四譯對校　飜譯名義大集』の力作一卷を出したが、これは大正五年文科大學叢書の第三卷として、またその附卷（索引）は同十四年にそれぞれ出版された。この書の有する世界的價値については、佛教研究の基礎として今日もなお遠く海外諸學者の注文に接するほどで、各方面からその重版が要望されている。なおこれよりさき、明治四十年に公刊された教授の『解說梵語學』は、わが國最初の梵語文法であつたのみでなく、その精緻・該博・懇切な說明は今日なお斯學の至寶として重版されている。

このように明治から大正にかけて、榊教授の活躍は極めて目覺しいものがあつたが、その獨自の風格と、峻嚴な講義は幾多の逸話を殘している。この間專攻の學生は大正十年卒業の高畠寬我ただ一人であつたが、印度哲學や佛教關係の專攻生で、その講筵に連なつた人びとも相當にあつた。大正四年にはじめて寺本婉雅が講師となつて西藏語を講じ、同七年から昭和十四年度までは常磐井堯猷講師が專門のヴェーダ文學を講じ、さらに大正十四年以降

は原眞乘講師が西藏語・巴利語、または梵語を講ずるに至り、ようやく本講座も次第にそれぞれの專門分野においてその內容を充實するに至つた。

かくて昭和に入るや、同四年原眞乘講師は助教授に任ぜられ、翌年には足利惇氏が講師となつて梵語文法・梵文學書の講讀を行ない、このころから專攻の學生も四、五名を數えるようになり、內容外形ともに大いに整備するようになつた。しかし昭和七年四月榊教授が停年退官することとなつて、急に本講座はその支柱を失なうに至つた。

その年六月足利講師は梵語學および古代ペルシア語學研究のため文部省からフランスおよびイラーンに留學を命ぜられたが、その間高畠寛我講師が代つて梵語文法ならびに梵語佛典を講じた。榊教授退官後は講座主任なく、西洋古典語學西洋古典文學の田中秀央教授が本講座を分擔し、同じく昭和十二年以後は印度哲學史の本田義英教授がこれを代行した。一方原助教授は同十三年に退職し、以後引き續き講師となつて、おもに西藏語や巴利語などを講じたが、十九年夏逝去した。また黑田親講師は、十三年から十五年まで梵語佛典の講義を擔當した。榊教授退官の後の本講座は約十年間、その講座擔任者を缺き、いろいろの意味において內外ともに多難な時代であつた。

しかしながら、昭和十六年には新たに伊藤義教が講師となつて、ヴェーダおよび古代中世ペルシアに關する講義を行ない、さらに十七年三月には足利講師が助教授に任ぜられ、また同じ年善波周が講師として梵語および巴利語について講義をするに及び、本講座もやや再建の氣運に向うこととなつた。

戰時中は原講師の死去や善波講師の出征などの影響はあつたが、たとえば二十三年度には講義として本田教授の「印度學」、研究として足利助教授の「印度文化に於ける文學の地位」、伊藤講師の「印度イラン語に於ける名詞の構成」、善波講師の「Ratnamālāvadāna」、演習として本田教授の「Saddharmapuṇḍarīka」、足利助教授の「Pañcatantra」、「Lalitavistara」、伊藤講師の「Vedic Chrestomathy」が講ぜられ、それに善波講師の巴利語および梵語文法が語學として加えられた。

本講座を分擔して來た本田教授は、二十三年九月退官したが、足利助教授は二十四年九月「古代印度に於けるイラーン文化の影響に關する文獻學的研究」なる主論文に對して、文學博士の學位を授けられ、さらに翌年三月に教授に任ぜられて、本講座を擔任するに及び、ここに榊教授以後その人を缺いていた主任教授を得て、ようやくその態勢が整えられるに至つた。

足利教授はその專門とする古代ペルシア學研究のほか、梵文學一般、とくに印度詩論、戲曲乃至は佛教梵語などを講じ、『ペルシア宗教思想』(昭一六)、『印度パルシー族とその習俗』(昭二二)、『印度史概說』(昭二九)などの著書があり、また從來未發見の、學問的にも極めて貴重な新出大無量壽經の梵本研究に從事し、阿彌陀經・大日經などの原典批判にも一歩を進め、他方印度學佛教學會の理事として、あるいはその他の學會にも關係をもつて活躍している。伊藤講師は中世ペルシア語に造詣が深く、二十八年には「マーヌシュチフル書翰集の解讀」に對して文學博士の學位を授けられ、わが國學界では未開拓に近い西アジア研究に一歩を踏み入れている。講義においては主としてヴェーダ、アヴェスタおよび中世ペルシア語を講じている。善波講師は主として佛教梵語ならびに巴利語の諸書を講じ、とくにインドにおける古代科學思想の研究に力を致し、印度哲學史における講義をも兼ね、思想と科學との關連から、難解であるがためにややもすれば等閑に附され勝ちな、インド學のこの方面を專心開拓している。さらに二十七年度からは本講座にも現代語を加えることとなり、澤英三講師を招いてヒンディーおよび近世ペルシア語を開講している。なお三十年度からは、海外留學生として三か年間米・佛およびインドにおいて梵語を研究して歸國した大地原豐講師の梵語文法およびパーニニ文典の講義が行われている。

このようにして本講座開設以來約半世紀、近時ようやくそれぞれの專門分野において本格的研究が進められ、專攻學生こそ多くはないが、大學本來の使命である學問そのものの研究、およびその成果においては見るべきものが少なくない。新制大學院文學研究科設置に當つては、わが國唯一の梵語學梵文學講座として本學がその獨立講座を

もち得たことは、敢えてその間の消息を物語るものといえよう。現在大學院は足利教授を中心に、伊藤、善波、大地原各講師がこれを補佐しているが、本講座がインド研究と同時に、とくにイラーン關係を重要視していることは注意されねばならない。近時の世界學界の動向から見ても、またわが國學界の趨勢から考えても、イラーン學を始めとする西アジア學の確立は、遲まきながらわが國においても、獨立した講座をもつべき段階に到達していることに異論はないであろう。榊教授が意圖し、足利教授をしてイラーン學に手を染めさせた眞意も、實にここにあつたといわねばならない。本講座はあくまで本來の梵語學梵文學の研究に徹すべきは勿論であるが、他方インド文化自體の眞の理解のために、わが國においてほとんど未開拓な、なお多くのそれに關連する學問分野の本格的研究をつねに必要としている。ペルシア研究なども實はその一環に過ぎず、さらにドラヴィダを始めとする南方インド語やプラークリット（中世印度語）などの本格的研究も、當然附隨的に興起すべきであるが、現在はまだその希望を滿すことができず、研究者はその將來を期さねばならない狀態にあり、本講座のわが國文化に對する使命は重大といわねばならない。

イタリア語學イタリア文學講座

本講座は昭和十五年十二月の開講になるが、それは多くの點において重要な意味を有している。すなわち從來外國語學校においては、イタリア語の實際的教授が行われていても、それを科學として研究するため、大學の講座として設けたのは、わが國では本講座が最初であり、また今日に至るもなお他の國立・公立・私立大學においては、同樣な完全な形の講座の設立をみていない。

このわが國最初のイタリア語學イタリア文學講座が誕生するまでには、京都大學を中心とした多くの先覺者達の

絶えざる努力が重ねられた。早く大西祝の手記である文科大學學科編成案には、すでにイタリア語學イタリア文學史の項目が掲げられていて、本講座開設の計畫が文科大學創設の時期に胚胎していたことが知られるが、それは實現に至らなかつた。しかるに上田敏教授は、つとにイタリア文學にも深い注意を拂い、大正初年とくに學生のために「ダンテの神曲」を講じ、あるいは講演によつてイタリア文學を紹介した。ついで厨川辰夫教授も綜合研究の上からまたこれの奬勵を試みた。もつとも社會學科にあつては、明治四十一年、米田庄太郎講師によつて、グロパルリの「社會學綱要」がテキストとして用いられたが、これは本學において正科目中伊書を用いた嚆矢であつた。

大正十年はたまたまダンテ六百年記念に當り、坂口昂、新村出、濱田耕作、厨川辰夫の諸教授、および大賀壽吉黒田正利らによつて『藝文』の「ダンテ記念號」が編輯され、同時にこれらの人びとが中心となり、イタリア文化の研究と紹介を目的とする「イタリア會」を組織した。その發會式に當り、イタリア大使館はとくに代表を列席させて慶賀の意を表した。その後、本會は新村、濱田、大賀、黒田らの人びとが主となつて初期の活動を續けたが、その間『藝文』の「ボツカチオ記念號」の特輯も行われ、また大正十三年にはイタリア總領事アルフォンゾ・ガスコおよび黒田正利を囑託としてイタリア語の講習が始められ數年に及んだ。またイタリア政府は、同國文學中の代表的傑作數十部を本學に贈り、大賀壽吉はその蒐集になる文獻二千餘册を寄せ、本學のイタリア文學研究に資しようとした。

新村、濱田兩教授は、かねてイタリア文學の一講座を文學科に加え、その充實をはかることを望んでいたが、ようやく昭和六年に至つて、イタリア語が副科目の一つとして新たに加えられ、ガスコ總領事が講師を委囑された。ついで昭和十一年ローマ大學ジュゼッペ・トゥッチ教授が交換教授として本學に來講するや、濱田教授とともに、日伊文化交流とその施設の急務を熱心に說き、とくに日本においては、他の大學に先んじてまず本學にその講座を開設することを熱望した。一方昭和十二年以來、日伊兩國間の親善關係は急速に增大し、第一回日伊文化協定が締

結せられ、同協定に基いて日伊兩國の代表的大學に、それぞれイタリア語學文學および日本語學文學講座を開設することとなつたため、イタリアにおいてはローマ大學に日本語日本文學講座が開設された。日本においては直接この交渉に當つていた外務省文化事業部が、當時總長であつた濱田教授のかねてからの希望を知つていたので、この際本學にイタリア文學講座を設置することに進んで協力しようとし、また時に財團法人原田積善會はこの事情を了解し、これが實現に必要な全費用の寄附を快諾した。かくて昭和十五年一月、外務省から當時の羽田亨總長のもとにこの旨申入れがあつた。そこで羽田總長はまず評議員會、および文學部教授會に諮問し、その決議をまつていよいよ實行に移り、文部省その他と數次の交渉ののち、ついに講座の開設を見るに至り、ここに本學創設以來多年にわたる希望が達せられることとなつた。本講座開設に當り、原田積善會が學界に寄せた好意、アウリッチ駐日伊大使、文部省專門學務局關口鯉吉局長、外務省市河彦太郎書記官、同箕輪三郎事務官、學內においては羽田總長、新村名譽教授、西田直二郎、成瀨清兩學部長はじめ、關係諸教官の盡力は特記すべきものがあつた。

さて講座は開設され、講義は黑田正利講師およびマライーニ講師によつて始められたが、本講座を專攻しようとする學生はまだ少數であつた。しかも第二次世界大戰の擴大にそれら少壯有爲の卒業生は戰死し、本講座は大きな打擊を受けた。

一方寄附講座として誕生した本講座はやがて正式講座となつたが、戰後創設に當り功績のあつた黑田講師は昭和二十四年十一月岡山大學の教授に轉じ、マライーニ講師また去つて、本講座の構成員に變革が行われることとなつた。これよりさき、かつて第一回日伊文化協定に基いてローマ大學に開設された日本文學講座に講師として教鞭をとつていた野上素一は昭和二十年十二月歸國、翌年三月から文學部講師を委囑され、本講座で授業を擔當していたが、二十二年五月には助教授に任ぜられ、ついで二十九年十月には教授に昇任した。二十五年以後の講義としては、野上教授が「イタリア文學史」を毎年講じ、研究・演習としては、「イタリア近代文學」(昭二五)、「イタリア

古典文學」（昭二七―二九）、「ダンテ研究」（昭二七―二九）、「リゾルジメント文學」（昭三〇・三一）、「義務論」（昭三〇・三一）、「ゴルドーニ研究」（昭三〇）などを講じ、その他、二十五、六年度はなお黒田講師が「ダンテ研究」を引き續き講じたが、二十五年度からは宮本幸三郎講師が毎年「イタリア現代文學」を講じ、また語學としてのイタリア語も擔當、さらにエンリコ・ガルロ講師は「ダンテ研究」（昭二七）、「ダンテの神曲」（昭二八・二九）を、ベンチヴェンニ講師は「イタリア近世詩」（昭二九）、「パスコリとレオパルディ」（昭三〇）、「ダンテ文學」（昭三一）を、林一郎講師は「ピランデロ研究」（昭三〇）、「イタリア近世文學」（昭三一）の講義をそれぞれ行なつて來ている。なお國澤慶一講師は本講座と密接な關係のあるスペイン語を引き續き擔當している。また二十八年大學院文學研究科の開設に伴ない、イタリア語學イタリア文學は言語學科の一部として發足、野上教授が研究・演習を擔當している。

なお昭和二十九年、再び日伊文化協定が締結され、本講座の構成員は學問を通じての同協定の實現に盡瘁することとなつた。一方早く野上教授は戰後復活した日伊交換學生選拔試驗委員となり、またローマ大學や、イタリア中亞極東協會との間に資料や書籍の交換を斡旋した。また池田廉助手は昭和三十年度日伊交換學生としてイタリア文學研究の目的で、パドヴァの大學へ留學のため渡伊した。なお本講座の卒業生は今日まで一三名に及んでいるが、その多くは各方面に活躍し、「日本ダンテ學會」、および「イタリア學會」を通じて斯學の發達に力を盡している。

西洋古典語學西洋古典文學講座

西洋古典文學、すなわち古代ギリシア、およびラテン文學が、歐洲における最古のしかも偉大な文學的遺産であり、かつそれ自體のもつ價値はいうまでもなく、さらにそれが近代歐洲文化の形成に、いかに決定的な役割を果し

たかは衆知のごとくである。歐洲各國においてはルネサンス以來、ギリシア・ラテン文學および語學の研究は、單に主要な一學科としてだけでなく、一般文化人の全教養の基礎としてもつとも尊重されつつ今日に至つている。わが國においては歐米と歴史的事情を異にするとはいえ、西洋古典文學研究の重要であることは、そのすぐれた藝術的價値からいつても、その後世への偉大な影響力からいつても、疑いをさしはさむ餘地はない。本學においては早くからこの重要性が認識され、すでに明治四十三年以來西洋古典語學が開講されている。すなわちギリシア語は新村出教授（明四三・大四—八）、深田康算教授（明四四—大三）が、ラテン語は榊亮三郎教授（明四四—四五）、田村初太郎講師（大二—三）、米田庄太郎講師（大五）、オリアンティス講師（大七）、厨川辰夫講師（大八）が、それぞれ擔當し大正九年に至つた。

田中教授

かくて大正九年七月田中秀央が講師に委囑され、ついで十一月助教授に任ぜられるに及び、西洋古典語ははじめて專任の擔當教官をもつに至つた。田中助教授は、言語學講座の一部として西洋古典語を擔當し、ギリシア語・ラテン語をそれぞれ毎週四時間ずつ（昭和三年から毎週六時間）講義したが、大正十一年から十三年にかけての在外研究中は、ギリシヤ語を菊池慧一郎講師が、ラテン語をエルダー講師がそれぞれ擔當し、菊池講師は田中助教授歸朝後も、なおその一部を擔當して昭和五年末に及んだ。

その後昭和六年田中助教授は教授となり、西洋文學第二講座を分擔するに及び、講義內容は一段と擴充され、毎週ギリシア語、ラテン語各五時間のほか、西洋古典文學普通講義として「古代ギリシア文學史」が毎年講ぜられることとなつた。もつともこれはすでに大正十五年以來、田中助教授が內容に多少の變更を加えながら、言語學特殊講義として講じていたもので、たとえばその中には、「ホメーロス研究」、「ギリシア悲壯劇史」、「ギリシア韻律論」

などがあり、また昭和十二年には古代ラテン文學史に關する特殊講義も行われた。

ついで昭和十三年五月、田中教授は西洋文學第二講座擔任となつたが、翌年にはついに多年の懸案であつた西洋古典文學講座開設が實現することとなり、西洋古典文學が本學部文學科の正科目として開講せられた。わが國の大學において西洋古典文學が正科目として獨立開講されたのは、實にこれが最初であつて、單に本學の一大特色であるに止まらず、わが國における西洋古典學研究の發達史上特筆すべき一時期を劃したものであつた。現在でも本學のほかに東京大學が、數年前開設せられた類似の一講座を有するのみであつて、それは本學當事者の先見と勇斷、また多年にわたる擔任教官達の努力の賜ものとすべきであるが、ことに田中教授の功績にまつところもつとも大である。

以來田中教授は、毎年普通講義として古代ギリシア文學史、特殊講義としてラテン文學史の概說に加えて、ギリシア語・ラテン語をそれぞれ毎週五時間擔當することとなり、また昭和十五年には服部英次郎講師が、第二回生のためにラテン語講讀を行なつた。さらに翌年には新たに松平千秋講師がギリシア語およびラテン語初歩講讀を擔當することとなつた。

田中教授は昭和二十一年三月停年のため退官したが、教授は大正九年本學に赴任以來二十數年間、終始斯學の教授と研究に獻身的な努力を續け、わが國最初の西洋古典文學科創設にもつとも貢獻したことは、すでに前述の通りである。多年にわたりギリシア・ラテンの二部門を單獨で擔任するというすこぶる困難な情況にもかかわらず、その熱意と精勵とによつて見事にこれを克服し、本講座の基礎を築いたのであつた。これに加えて教授は昭和六年以後文學部以外の全學學生のために開講された毎週二時間のラテン文法講義をも擔當し、西洋古典語の普及に貢獻するところが少なくなく、二十二年十二月には名譽教授の稱號を與えられた。

かくて田中教授退官後、本學科は陣容を新たにし、松平講師はギリシア語の講義に專心し、ラテン語は野上素一

講師が主としてこれを擔當することとなつた。ついで昭和二十二年に松平講師は助教授に任ぜられ、普通講義として古代ギリシア文學史を開講、同年度はホメーロスを中心として「ギリシア敍事詩概說」を講じた。研究としてはエウリーピデースの悲劇「メーディア」について松平助教授が、またクィンティリアーヌスの "Institutio Orationis" については、野上講師が新たに言語學講座所屬助教授に任ぜられて講義し、その他、ギリシア・ラテン語各四時間を松平、野上兩助教授が分擔することとなつた。翌二十三年度は松平助教授が普通講義として「ギリシア抒情詩概說」を、研究としてソポクレースの「オイディプース王」を講じ、ラテン文學の研究としては、野上助教授が前年度に引き續きクィンティリアーヌスを講じた。

昭和二十四年度は松平助教授が普通講義において、「ギリシア抒情詩論」と題し、前年度とは異なつた角度から、古代ギリシア抒情詩の韻律と形式を中心として講じ、普通講義としてはやや專門的な講義を行ない、研究においてもヘーシオドスの「仕事と曆日」を主題として、從來に比してかなり高度に專門化した講義を試みた。ラテン文學は野上助教授が前年度から繼續のクィンティリアーヌスのほか、ウェルギリウスの「アエネーイス」について講義を行ない、二十五年においては松平助教授が「ギリシア悲劇史」、研究は松平助教授が前年度につづいてヘーシオドス、さらにホメーロス「イーリアス第一卷」を、野上助教授は新たにカエサルの「ガリア戰記」を講じた。

また二十六年度は新制大學の發足に伴ない、普通講義はいわゆるBコースとして、教養部學生にも聽講しうるように編成されることとなり、その內容にも多少の變更が加えられたが、同年度は松平助教授が「ギリシア敍事詩及び抒情詩」について概說を行なつた。研究としては松平助教授が「イーリアス第二卷」を、野上助教授が「アエネーイス」を講義し、さらに東京大學から神田盾夫助教授を講師として招き、「ヘレニズム時代の文學」について集中講義が行われた。さらに二十七年度普通講義としては松平助教授が、「アッティカ悲劇概說」を行ない、研究としては「ホメーロス讃歌集」の中からとくに重要なもの若干を選び、後期敍事詩體の特徵に注目しつつ、詳細な解

説が試みられ、演習としては松平助教授の「トゥーキューディデース」、泉井教授の「ルクレーティウス」、野上助教授の「キケロー」の講讀が行われ、また新たに原納一富講師の「アッティカ雄辯家」の講讀も加えられた。

二十八年度の普通講義は松平助教授が「ホメーロス概説」を行ない、研究としては同助教授のエウリーピデース「バッカイ」、泉井教授の「タキトゥスの編年史」（言語學と共通）が行われ、また原納講師がアリストパネース、クセノポーン、ヘーロドトスの講讀を行なつた。なお從來はギリシア語およびラテン語の文法の講義が週二時間であつたが、同年度からはこのほかに、四時間コースのものを新たに開講し、西洋古典學を專攻しようとする學生の學力增進をはかることとなつた。そしてギリシア語の四時間コースを松平助教授が、同二時間コースを鈴木照雄講師が擔當し、ラテン文法は山田晶講師が四時間コースを、泉井教授が二時間コースを擔任した。

さらに同年度からは新制大學院修士課程が發足し、本講座は言語學およびイタリア語學イタリア文學講座とともに言語學科を構成、それぞれ專攻學生を收容することになり、松平助教授はとくに大學院のために「ギリシヤ語史」の講義を行なつた。またその年八月には「西洋古典語學西洋古典文學」の講座新設が認可され、かくて昭和十四年講座外正科目として開設された本學科はここに名實ともに獨立した一講座として安固たる基礎を築くに至つた。

翌二十九年度は、松平助教授が在外研究のため英國へ出張し、ために同助教授擔當の講義はすべて第一學期をもつて打切られたが、神田講師は「ヘレニズム時代の文學」と題し、アレクサンドリア時代のギリシア文學について集中講義を行ない、小川政恭講師はホメーロスの「オデュッセイア」を、野上教授はキケローの作品のいくつかを講讀、また中村善也講師はギリシア語初級講讀を擔當した。三十年度も松平助教授が引き續き不在のため、同助教授擔當の講義は行われなかつたが、研究として高津春繁講師が「ギリシアの散文」と題してギリシア散文の成立を、その方言の發達との關連において說述し（集中講義三十時間）、小川講師はエウリーピデースの「イオーン」、ソポクレースの「オイディプース王」を講じ、また泉井教授はネポースおよびプラウトゥスをテキストとして、古

典期のラテン語とそれに先立つ古體のラテン語とを對比しつつ、ラテン文法および文體について講義を行ない、演習には野上教授がキケローの「義務論」を、中村講師がリューシアースの「辯論」を講讀した。なお語學はギリシア語を岡田正三講師と中村講師が、ラテン語は鈴木講師と山田講師がそれぞれ擔當した。また同年度からは新制大學院博士課程が新たに發足、本學科にも專攻生一名の入學を見た。

以上が昭和三十年度末に至る本講座沿革の概要であるが、その間本學科を專攻して學士課程を終えたもの十三名、修士課程を修めたもの一名である。

なお昭和二十五年わが國における西洋古典學の進展をめざして、「日本西洋古典學會」が創立せられ、その第一回總會が本學部において開催された。以來同學會は事務所を本研究室内に置き、その運營は主として本講座の擔當するところとなつて今日に及んでいる。昭和二十八年からは研究發表機關誌として、年一回「西洋古典學研究」を發行し、その編輯には本講座が西洋哲學史、その他關係諸學科と緊密に提携して當り、今日までに第三號の發刊を見た。これによつて國内における斯學の興隆が期待されるとともに、海外の學界との連携も次第に盛んとなりつつあることは、わが國の西洋古典學發展上まことに喜ぶべきことである。わが國の西洋古典學研究は、歐米に比してその歴史は極めて淺く、從つて種種不利な條件下に曝されていることは否定できない。その中でも、とくに高校で古典語が教授されないために、專攻者は大學においてはじめてこれを學び始めねばならないこと、また研究資料、とくに書籍の整備がまだ不十分であることなどがまず擧げられるであろう。しかしそのような多くの深刻な困難にもかかわらず、近年におけるわが國の西洋古典學の發展には目覺しいものがあり、その前途は洋洋たるものがあるといつてよい。將來わが國の西洋古典學研究を一段と進展せしめるために、研究と有能な專門學者の養成との兩面において、本講座は重要な使命を果すものとなるであろう。